



黒い名刺に気を付けろ！【社員編】

本編＋番外編

牡丹えび

第一話

人間はいつだってお金に困っている。

と、言うのは「金融会社スチャラカぱらだいす」にて、人事を行っている雪嶋雪人（ユキシマユキト）の率直な感想だった。

働いていてももう百年になるが、何処の国の何処の支店にいても、お金を借りに来る人間と言うのは後を絶たない。

お金と言うものはそんなに魅力的なのか。

彼はふと考えて、物々交換が盛んではなくなって久しくなった人間社会ではやはり、必要なものなのだろうと納得していた。

さて、お気づきかも知れないが、雪人は「百年も」、勤労しているので、人間としての寿命は現時点で既に終わっていてもおかしくはない。

しかし、彼の見た目は二十代後半の青年期のもの。決して若作りしているわけではなく、彼の成長はそこで止まっているのだ。

結論から言うと、人間に時々白い目を向けてしまう雪人は人間ではない。

一言で言うと、魔物。更に付け加えると、雪などの冬に因んだ「雪男」なのである。厳密に言えば、彼は「冬の王」というかなり畏まった地位にいるのだが、「お雪！お前、この件におうめを行かせるなって言っておいたろうがっ！」

「ご、御免なさいっ！ひ、ひひ人手が足りなかったんです！」

他の社員に己の領分である人事について文句を言われて、怯えながら両手を合わせ、椅子に正座してペコペコと謝ってしまうくらい気が弱い性分だった。

「おうめが無事に帰ってこなかったら、お前、溶かすからな」

「ひひひひひひ！そ、それだけのご勘弁を！」

おうめ、こと近江近衛（オウミコノエ）を心底心配し、雪人を脅しているのは遠藤円（エンドウマドカ）という社員なのだが、彼もまた、人間ではなく魔物だった。彼は太古の人間と魔力を持った狼の異種カップルから生まれた人狼の末裔である。

因みに近江は吸血鬼だったりする。

「まあまあ、エンちゃん。お雪が溶けたら今年は雪が降らないかも知れないから。智が雪を見たそうにしてたからそれ、困るから」

社員の命より恋人の期待を裏切らせないために遠藤を制するのは、社長の神坂築（カミサカキズク）。彼は死神で、一応「神」がついているが、死に対して触れ過ぎている一族だからか、神々には嫌われているので魔物と言う分類にされている。

遠藤が雪人を睨みつけながら客用の椅子に腰を下ろすと、受付にいた蘭林香（ランバヤシカオリ）がそつなくお茶を出した。

社員用の徳用を煎れるあたりは出来た受付だが、隙を見ては遠藤や他の男性社員を誘惑しようと流し目を送るあたりは、流石に性に奔放な蝶の魔物というところだろうか。

「遅くなりました！」

「いらっしゃい、智」

雪人が未だにビクビクしていると、勢いよく自動ドアが開いて、ラフな格好をした少年が入ってきた。

顔が史上最強に童顔で、そのうえ背も平均以下なのでともすれば中学生に見られるくらいだが、慌てて席につく鷺沼智（サギヌマサトル）は現在立派に有名大学に通っている大学生。

「可愛い智は焦っていても可愛いね。また惚れ直すよ」

「……あほが」

神坂がうっとり呟いたのに反応して頬を染めた智の担当は経理。彼は高校生の時に「黒い名刺」を拾ってしまったのが縁でこの会社のアルバイトになり、紆余曲折を経て神坂の恋人になってしまった、かなり可哀想な、この会社では唯一の人間だった。

神坂と智の馴れ初めは後々語るとして、今回の主人公である雪人は未だ震えている指でパソコンを操作して、一週間先の人事を組んでいた。

「社長、御厨さんが未だ九州から帰ってきてないので明日は無理ですよ」

最年長の御厨剣（ミクリヤツルギ）が、「俺に任せておけ」

大見得を切って不良債務者に独りで立ち向かって行って既に三日。連絡がつかないのはいつものことと思ってあきらめているが、今後の予定のことを考えると頭が痛い問題だった。

雪人が問いかけると、神坂はん〜と背の筋肉を解しているようにしながら「みくりんなら当分帰ってこないんじゃないかな。俺がついでにあっちの方も頼んじやったから長引いてるみたい」

「……………何体分ですか」

「確か十体かな」

多分、それだけではない気がする。雪人は溜息をついて御厨を取り立てのローテーションから外した。

金融会社を営んではいるが、本業は金貸しではない。魔物に大変重宝されていて、人間には出来ない仕事を本業としている。

だからと言って桃色系の「そっち系」ではなく、むしろ赤信号的な「そっち系」。命にかかわるものだ。

魔物の世界にいる間は、魔物の命にはほぼ限りがない。しかし、人間の世界では勝手が違う。不用意に死ぬことがあるし、パーツを失うこともある。

スチャラカでは、魔物が失った「人間としての命やパーツ」を生前に積まれた金と言う「保険」に似合った分だけ復元させることを本業としている。

保険会社の凄い版ですね、と智は凄まじく適応能力のある括り方をしていた。雪人が思うに、こういう智だからこそ、神坂は彼を男性にも拘らず半ば強制的に恋人にしたのだ。見た目こそ侮ってしまうくらい童顔で可愛らしい智だが、普通の人間にはないものがたくさんあった。

「みくりんが駄目だからっておうめと俺に回すなよ。明日は絶対に有給だからな」

「……う。他の人も帰ってこられるかどうか。だ、駄目ですかっ？」

「駄目に決まってるだろ！何か月前から申請してたと思ってるんだ！明日は向こうに帰って付

き合って五十年目の記念デートをするつもりなんだからな！」

「解りました……」

近江と遠藤は生まれた時から御家の都合とやらで一緒にいる間柄で、それが縁で付き合い合っている。

魔物でも気位が高い吸血鬼の一族で近江は特別な立場で、魔物の中ではあまり歓迎されていない獣の血が入っている遠藤とは付き合うにあたってはいろいろあったらしい。

「最近さ、あいつ、自分にも子供が出来たらきっと俺に似た可愛い子供を産めるのによってベッドの中で可愛いこと言って困らせてくるんだ。困ること言うのに可愛いつつうのは最強だよな」

「……………」

「智、男同士で子供が産めるならどんな子供がいいかな」

「あなたは実体化させそうで怖い」

「社長、そういう案は言わなくていいですよ。あいつがやってくれて言ったら、俺はノーとは言えないし。かと言って、あいつが俺に似た子供を構って俺のこと構ってくれないとすげえムカつくし！」

「……………」

白昼の社内でする会話ではない。

雪人は更に溜息をついてお茶を飲んだ。人間にとっては十分くらい冷めているが、彼には少し熱い。

「あ、そうだ。お雪」

「はい？」

智の安全のためにと勉強し出して、遂に趣味になってしまったらしいBLのドラマCDを聴きながら神坂は、「明日はここにお客さんが来るから、お前は自腹でお茶とお茶請けを買っておけ」

平然と経費では落ちない宣言をした。

「どうして自腹なんですか」

「お前が一番被害を出しているからだ。これについては全社員で見解が一致している。無駄金を出すと智が文句を言って相手をしてくれなくなるから、俺としてはお前を容赦なく切り捨てることにした」

「被害？」

社の無駄を智が嫌うのは解るし、神坂が恋人至上主義で社員を切り捨てるのはいつものことだ。

雪人も気にしていないが、自分が一番被害を出すとは一体何なのだろうか。

小首を傾げても思い当たる節がない。

「社長、僕はあれは雪嶋さんのせいじゃないと思うんですけど」

「智。時には現実を見ろと厳しく言わないといけない。魔物でも人間社会に生きる社会人として、無自覚でいいことと悪いことがある」

もっともらしいことを言った神坂はヘッドホンのコンセントを外して音量を上げた。

【あんっ、いいっ！もっと、もっと奥を突いて！あなたのその立派なxxxで！】

「キャアああああ！」

智がペンを神坂の顔面に投げつけ、雪人はおよそ男性らしからぬ女子力のある悲鳴をあげた。

その瞬間、雪人の周りに突如氷の膜が現れ、更に室内を氷で覆っていった。あっという間に電化製品がぶっ壊れる。

「明日来るのは修理業者だ。このあたりの担当者が代わるらしい。つまり、そういうことだ」

この会社の電化製品はほぼ防水だが、凍ってしまっは意味がない。毎回買い替えるのでお茶やお茶請けくらいは省きたいと。

智がくしゃみをしたのを見て、神坂は苦い顔をして彼にコートを着せる。因みに真夏だ。

雪人は恥ずかしそうに氷の中で縮こまった。

第二話

人間の世界は年々、温暖化と言うのは間違っていない。初めて来た時、雪人は自分の総べる世界とあまり変わらない寒さだったのをふと思い出した。

「今日は何度あるんだろう……」

滲み出る汗でべたつく前髪を掻き上げながら、帰路を急ぐ。

以前担当だった修理屋は老年の人で、そういえば定年だと言っていた。定年者が後を譲るのだから今度来るのはきっと若い人だろう。

狙いを立てた雪人は若い人が好みそうな、この時期におススメだというマンゴーフレーバーの烏龍茶とクッキーを買った。

「うう、暑い……っ」

身体は人間として生きられるようになっていたとはいえ、元が雪国で生きている身だけあって暑さには弱い。

多少ふらつきながら歩いていると、後ろに気配を感じた。

「あの、済みません」

侍ではないが、商売柄それなりに心得ている雪人は心持ち緊張したが、「この辺の方ですか？道を訊いてもいいでしょうか」

スーツ姿の男性の声は本当に困っているようで、申し訳ないが雪人は安心した。

「僕で解る範囲ならいいんですけど」

「この近くで間違いないと思うんですが、金融会社スチャラカぱらだいすって言う会社なんですけど」

「……うちに御用ですか」

「え、社員の方ですか？」

メモ用紙を見ていた男性が雪人をじっと見詰めた。

雪人はその瞳があまりにも黒くて奥が深くて、そして綺麗な色をしているので何となく落ち着かない気分になった。

「あの……？」

「あ、はい、そうです！僕、スチャラカぱらだいすに勤めてます」

何の御用ですか、と訊ねるのは野暮だ。

しかし、と雪人は不思議に思った。

スチャラカは魔力によって必要性を感じないものにとっては見つかりにくい仕組みになっているが、肩を並べる男性は客らしいのに行き方が解らないと言う。

逞しい体躯をしているが、もしや殴り込みとかの類で、下見に来ているのではないか。

会社に近付くにつれて不安が募ったが「俺、男の人で美人だなんて思ったの初めてですよ」

照れたように笑う男性の顔に邪悪なものを感じることはなく、雪人はまたも彼のような人間がどうして自分の会社を探しているのかが気になった。

そうこうしているうちに会社が見える位置に来たが、そこで神坂が待っていることに気付いて

声をあげる。

「あ、しゃちょ……」

「お雪！外出中は連絡がつくようにしておけって言っただろう」

「は、はい。済みません。スマホ、苦手で触りたくなくて……」

「だからって、……あ、お客さんと一緒だったんだな」

「え……？」

傍らにいた男性を見上げると、「こんにちは。神坂社長ですね。この地区を担当することになりました、修理屋の手代木篤志（テシロギアツシ）です。宜しくお願いします」

男性、手代木は元気よく挨拶をするので雪人は驚いた。

「こんなところで立ち話もなんですから、中に入ってください。職業柄、関係のない方が入るのは外間はよくありませんが、まあ誰も気付きませんから」

朗らかに話す神坂は雪人に早くお茶の準備をするように促す。慌てた雪人は走り出しそうになって何も無いところで突っかかり、つんのめってしまう。

「大丈夫ですか？」

「は、はい」

手代木が横から手を出して雪人を支えてくれなければ、クッキーが粉に戻ってしまうところだった。

ホッとしたのもつかの間、触れている部分に何となく熱を感じて雪人は俄かに恥ずかしくなってしまう。

彼は恥ずかしくなると魔力の制御が出来なくなって暴走させる癖がある。思わず顔を押しえてしまっていると、「こら、馬鹿者。自制せい」

神坂にチョップを食らって痛みで我を取り戻した。

「さっさと行け」

「す、済みません。手代木さんも、有難う御座います……」

額を擦りながら準備をしていると、「社長にもうちょっと手加減するように言いますね」

今日は来るのが早かった智が苦笑してお湯をティーポットに入れた。雪人は熱湯がかかるのを嫌って智に任せっきりになってしまう。

「おい、俺の智が火傷したらどうする。白い肌に変な傷が出来たらお前を溶かす」

「す、済みません」

「僕はあるものの所有物じゃないし、物騒なこと言わないでくださいよ」

神坂は笑いながら言う時が一番怖い。本気だ。熱いと思いながらもお茶を煎れるのを代わった雪人は一応と電化製品をチェックする手代木を遠めで見詰めていた。

手代木の隣にいる神坂も長身だが、彼も負けないくらいの長身だった。そして何より、人間でここまで整った容姿をしているのを雪人は見たことがなかった。

スチャラカは智以外が魔物である。人間は外見に判断されやすい、と言うので雪人を含めた社員はかなりの美形だった。雪人や近江などの元々人型で過ごせる魔物はそのままの容姿で美形なのだが、化ける必要があるものは美形に化けさせる。これは社員を選考した神坂の趣味も多分に

含まれていて、人間が営む同業からはホストやホステスのクラブ扱いされたこともあるくらいだ。

「皆さん、物凄い美形ですね」

今いる社員が手代木に挨拶を終えると、彼はお茶を飲んで感嘆の溜息をついた。

「なんか、人間とは思えないくらい整ってて、この場にいるのが恥ずかしいくらいです」

「あー、僕もたまにそれは思いますね」

人間の智が苦笑する。

「そうですか？智が可愛いのは当然として、手代木くんはモテるでしょ」

「いえ、俺なんて！……顔つきは派手だって言われるんですけど、みんなお友達止まりなんですよ」

気恥ずかしそうに頬を掻く手代木に微笑ましいものを感じた雪人だったが、ちらっと目線移して怖いものを感じた。

「じゃあ、うちのランランなんかどうです？未だ二十四歳のぴちぴちですよ」

神坂が面白がるように蘭林を指し示す。

「あら、シャチョからご指名があったんならクッチャッテいいってことですかあ？」

「ランランさん、それはちょっと……」

「もー、智ちゃんにはシャチョがいるでしょ、オネイサンの邪魔しないでー」

智が制止に入るが、雪人の危ぶんでいた通り、蘭林が目を輝かせて受付の囲いからひょいっと足を延ばした。そのスラリとした脚線美に引っかけられない人間はいないとばかりに。

手代木もあまりの大胆さと妖艶さに頬を染めたが「蘭林さん、ですよ。女性は自分から足を出してはいけません」

ハッキリと言ったので、一同目を丸くした。

「蘭林さんは妖艶美女って感じで凄くいいと思います。でも楚々とした雰囲気を持ったら向かうところ敵なしって感じになると思いますよ」

「はあ……」

更なる追撃。これには蘭林も呆気にとられて間抜けに頷いただけだった。

男でも女でも振り向かせることが容易く出来る蘭林の魅力を持って、今までにこの事態はなかったので雪人も呆然としたが、「雪嶋さん、このお茶美味しいですね」

手代木は気にした風でもなくお茶を飲んで雪人に微笑みかけた。

「前任者から聴いてるんですけど、ここの会社は国産で、しかも物凄く高い防水電化製品を使っ

ていただいている、うちとしても修理のし甲斐があるんですが」

「ただ、何故か氷結して故障するという事例が多いそうなんですけど。今見せてもらっただけでも軽い氷結の跡が見られているので、……まさか水でもばらまいてるんですか？」

「はは。まさか……」

実は自分が凍らせているとは言えず、雪人は申し訳なさで目を伏せた。

それが、魔性を帯びているかのようにとてつもなく美しく見えることに気付いたのはその場の

人間のみ。と言っても二人だが。

「智、なに赤くなってるの。浮気は許さないよ」

「あほか！誰が浮気なんて」

「じゃあいいけど。……今ので完全に墮ちたな」

「は？」

「面白くなるぞ、これは」

ニヤニヤし出した神坂の視線の先には、魅せられたように雪人に釘付けになっている手代木の姿があった。

第三話

「……これは、氷が基盤まで入っちゃってますね。でもどうしたらこんなところまで水が入るんだろう。そもそも凍ってるってなんでだろうな」

「済みません済みません、済みません」

「どうして雪嶋さんが謝るんですか？」

「済みません」

ひたすら頭を下げる雪人に、手代木が苦笑する。

先ほど連絡を入れて直ぐに来てくれた手代木は早速動かなくなった電化製品の裏蓋を開けて言ったのが今のことになる。

実は近江と遠藤のキスシーンを見てしまい、恥ずかしくなって魔力を暴走させて電化製品を氷結させたとは、言えない。

しかもキスシーンと言ってもただ頬に唇をくっつける外国で言えば単なる挨拶程度のものであった。自身も外国での生活経験がある癖に長く日本にいるからか、すっかり日本ナイズされてしまいそういう光景だけでも雪人にとっては恥ずかしく見えてしまう。

「あの、クーラーも壊れてしまっていて。暑いですよ。冷たい飲み物持ってきます」

「済みません。有難う御座います」

手代木は修理できるものと買い替えが必要なものをリストに書き上げて簡単な書類を作っている。

「今日は皆さんいないんですね」

「あ、そうなんです。みんな仕事で」

智は大学、他の社員は取り立て。社長の神坂は本業で魔物の世界まで行っているし、蘭林に至っては昨日引っ搔けた男といるから今日は出社しないと言う。

「失礼かも知れませんが、金融会社さんで独りきりの留守番って怖くないですか」

手代木が心配そうに言うので、雪人は優しい人だなあと感心してしまった。

「怖くないって言ったら嘘になりますけど、僕でも処理できますから大丈夫ですよ」

この会社は何度となく殴り込みや強盗などの犯罪者が入ってきたことがある。しかし一度も命はおろか金品、備品すら盗られたことはない。もちろん怪我人もいない。

何せ、やってくる犯罪者がどんなに凶悪だろうと人間に過ぎないからだ。魔物が本性である社員がかかれば赤子の手をひねるよりも簡単に危機は去る。

しかし智を雇った当初、彼がいる時に強盗が入った時にはえらい惨事が起きた。と言っても社員側ではなく、本来は加害者になるだろう人間側に。智の貞操の危機だと勘違いしてブチ切れした神坂がとんでもないことをしたのだ。

そのことを思い出してふと唇に笑みを載せた雪人を見て、「雪嶋さんって案外強い人なんですか？」

手代木が好奇心を覗かせてくる。

「いえ、僕をご覧の通り非力ですよ」

長袖でも解るくらいの細い腕を少し恥ずかしそうに雪人が示すと、手代木がどれどれを優しく掴んだ。

「おー、細いですね。女の人って程ではないけど」

「でしょ。手代木さんはしっかりしていて羨ましいくらいです。何かスポーツをやっていたんですか？」

「大学でテニスをしていたんです。サークル程度だったんですけど、割としっかり扱われました」

「僕は運動は全然出来なくて。夏は外に出るのも嫌なんですよ」

外見通りだろうと雪人は苦笑する。

手代木みたいな恵まれた体躯の男性はさほどいないと思うが、それにしても普通の成人男性にしては雪人は瘦身で色も白い。しかしそれが変に気持ち悪く見えたりしないのは、雪人の容姿が日本人と言うよりは欧州人のようにやや彫りが深い顔立ちをしているのと、雰囲気清廉だからだった。

「日本の夏は暑いから仕方がないですよ。雪嶋さんは外国の方なんですよ」

さらっとそう訊かれるのも初めてではないので雪人は頷いた。元より雪人は灰色に近い銀髪と寒い日の空のような蒼い瞳をしているのでどんなに頑張ろうとも日本人には見えない。

「名前は日本人なんですけど寒い国の出身なんです。この国より、ずっと寒い」

雪人の国には日本のような四季はない。天気はあるのだが、大抵雪が降っている。国の天気は雪人の心と直結していて、雪が降っている時が通常営業なのだ。

「寒い国ですか。俺は北海道出身なんで寒さには強いんですよ」

書類に目を通して社長席に置いた雪人は手代木の労にお茶で持て成した。

「雪嶋さんは雪人さんって言うんですよ。なんか正に雪って感じですね」

「ですね。社長は狙ってますから」

「神坂社長がどうかしたんですか」

「え、あ……いや、社長と同じことを言っているなって」

社員たちの名前とあだ名は神坂が決めている。苗字名前ともに改名できるわけではあるまいし、雪人は誤魔化しを打った。

「初めてここの社員の方を見た時は本当にビックリしました。みんな美男美女で」

手代木も深くは追及せずに話を切り返す。

「でも、これだけ美形が揃っていると色んな意味で有名な店になりそうですけど、人だかりとか出来ないものなんですね」

「金融会社ってみんなこんな感じですよ」

「そうですか。うちのお得意先にも美形揃えましたって言う感じのちょっとアレな職業のお店があるんですけど、そこは迷惑って言うくらい人だかりが出来てますよ」

幸寿地区は、いわゆる歓楽街になっている。スチャラカは中心地からは離れているがやや特殊な職業の店も近くにはある。顔で売る店も確かに存在しているのだろう。

「でも、俺が見た中では雪嶋さんが一番だな」

「なにがですか？」

「雪嶋さんが一番美人だと思います」

「・・・・・・・・」

「あ、別に女っぽいとかそういう意味じゃなくて、純粹に美しい人だなんて。美しいって一言で言っちゃうとそれまでなんですけど、なんか幻想的な感じがして。色が白いせいか、人形みたいにさめざめするような、美貌？って言うか。上手く言えないけど、雪嶋さんを見ていると、素直に美しいってこういうことだなんていつまでも見ていたいなって思えてきて」

焦っている手代木を見て、雪人は何だか変だなあと考えた。

何処の国にいても、自分の国にいてさえ雪人は外見で賞賛を受ける。人間から見ても、魔物から見ても彼の容姿は超一級と言えるからだ。

自分のしていることにあまり自信がなく、褒められることに慣れていない控え目な王様である雪人でも外見に関しては程々に慣れてはいた。

しかし、「……ゆ、雪嶋さん……？」

手代木に言われると頬がじわじわと熱くなってくるのを感じてどうしようもない。指先がじんわり痺れるような、こそばゆい感覚に囚われてしまう。恥ずかしさがあるのにいつものように顔を隠すことも出来ない。

「あ、あれ？なんか寒い……」

急激に室温が下がってきたのに気付いて手代木が半袖から覗いている自身の腕を摩る。

雪人はそれに気付かず、呆けっとしたまま室温を下げ続けた。見る見るうちに床に霜が降りる。

手代木はまさか雪人が温度を下げているとは思わず、ひたすら不思議そうにしている。くしゃみをしかけた時、「お・ゆ・き！」

「あだっ！」

後頭部を俄かに衝撃が襲って雪人は我に返った。部屋の氷結は免れる。

「お前、大丈夫か？このところ不調じゃないか。熱でもあるんじゃないだろうな」

「熱はないですよ」

むしろ雪人に熱があったら溶けて消滅する。

自分でも訳の分からないことだったと雪人が不思議がっていると、神坂が彼の額に手をあてた。

「うん、俺の方が熱い」

「当たり前じゃないですか」

帰ってくるなりチョップして更に病気を疑うなどと、あんまりだと雪人が呆れていると「……神坂社長と仲がいいですね」

手代木が少し低く小さい声で言うので、話の途中だったなと思い出した。

「社長はイジメるのが好きなだけなんです」

ジンジンする後頭部を押さえて神坂を見ている雪人に「好きな子ほどイジメたくなるのって男のサガですよ」

手代木は苦笑する。

「人間って面白いですね。手代木さんもですか？」

「いえ、俺はうんと優しくしたり甘やかしたい方なんです」

「そうなんですか」

「二人なら、もう大丈夫ですよ。じゃあそろそろ行きます。お茶、美味しかったです」

行儀よく去っていく手代木を見送っていた雪人の背後で「確かに好きな子には優しくしてるよな」

不器用だし、ちょっと嫉妬深いけどな、と神坂は密かに笑いを堪えていた。

第四話

目が眩むくらいの陽射しも小休止なのだろうか、久し振りに涼しいので雪人はお昼ご飯を外で食べることにした。

スチャラカの日本支部で働き出した時から世話になっている弁当屋は、雪人が知る限り何代か代替わりしているが味は昔も今も変わらない。流石に戦時中は店がやっていなくて淋しい思いもしていたが。

「いただきます」

手を合わせて誰に言わずとも挨拶をして、マイ箸を構える。

この幕の内弁当は、いかに効率よく全てをまんべんなく食べることが重要ではないかと雪人は常々思っている。

今日は季節ではないのに鮭が乗っかっていてバランスが悪いなあと思わず眉を寄せる。

自分の国では食事を必要としない魔物は、人間の世界で人間らしく生きるために食事が必要な身体になる。大抵のものは面倒くさがるが雪人は楽しんでいた。もっとも、自分で料理をすとかの楽しみまでは百年経ってはいとも見い出せてはいない。

「あれ、雪嶋さん」

「手代木さん」

ここでお昼を摂るつもりだったのだろう、手代木が弁当が入っていると見られる巾着を片手にして近付いてきた。雪人はそっと席を詰める。

「雪嶋さん、幸寿幕の内なんて豪華な昼食ですね。俺なんて手作りですよ」

弁当を広げる手代木の手元のものは、豪華な幕の内も色褪せるくらい色鮮やかなおかずがいっぱい詰まっていた。

手代木は独り暮らしだと言っていたので自分で作ったということになるだろうが、一般男子というよりかなり女子力の高い弁当だったのできっと彼女が作ったのだろうと思った。

最初の時とは違い、彼女が出来たのだろう。蘭林にも靡かなかった手代木の彼女だからきっと美女に違いない。そう思った雪人は、何故か胸がちくんと淋しい痛みを訴えたのでふと摩ってみた。

「どうしたんだろう？」

「食べないんですか？」

「あ、食べます」

二人でもそもそも食事を採っていると、沈黙が落ちてきて何だか落ち着かない。普段のんびりしている雪人が思うのだから手代木はもっと落ち着かなかったのだろう、急にがっついて食べたと思うと持参していたお茶を一気飲みして、その様子を驚いて見ている雪人を真っ直ぐ見据えた。

。

初めて会った時と同じ、真黒な目は今日は何処か熱を孕んでいるように雪人には見えた。

「あの、雪嶋さん。……率直に訊くんですけど好きな人って、いますか」

「好きな人、ですか」

真剣に訊かれて、雪人も真剣に考えた。

これまでの経験で好きになった人間はおろか同族もいない。それに、雪人は恋愛という形がなく何処か不安定で、持ち主を狂わせてしまうある意味で魔物より怖い存在をあまり好んではいなかった。それは、自分の母親である先代の王、女王のことが一因しているがそれを手代木に言うわけにはいかなかった。

言葉を探している雪人に痺れを切らしたのか、手代木は視線を落として手元を見詰め口を開いた。

「好きな人がいるんです」

その言葉に、雪人は何故か心が揺れた。

「笑われるかも知れないんですけど、一目惚れって言うやつなんです。道で、見かけて」

どうやら恋の相談らしい。一体いつの間に手代木はここまで自分に心を開いてくれていたのかと雪人は不思議に思ったが、信頼してくれているのだと思って傾聴することにした。

でも、これまた原因は不明だが胸がざわめき出した。

「見かけた時に何か接点を作らなきゃって思って慌てちゃって、思わず声をかけたんです。自分でも白々しい感じだったんで不審に思われてたらって、今思うと怖いんですけど」

手代木に声をかけられたら、大抵の女性にはこやかに応じてくれるだろう。何も思うところがなかった雪人ですら、その魅惑的な瞳に魅せられそうな心境に陥った。

「その人、とっても美しい人で、でもそれだけじゃなくて喋ってみるとのんびりしているところや可愛らしいなって思うところもあるんです。謝ってる時とか、なんかにやけちゃうくらい可愛く見えてどうしようもないんです」

本気ではなかったとはいえ、あの百戦錬磨の蘭林を前にしても動じなかった手代木がにやけるくらいの女性の想像が出来ない。芸能人を想像してみても彼が好みそうなタイプを想像するには雪人にはデータが不足していた。

「その人、好きな人はいないみたいなんです」

「じゃあ告白してみるんですか？」

「……え、あの……、まあ……」

雪人の当然のような問いに手代木は呆然としているようだった。

「でも、その人、凄く仲がいい人がいるみたいなんですよ……」

「ライバルと言うわけですか」

「……まあ、そうですね……」

「これは昔読んだ小説の受け売りになりますが、そういう時はひたすら自分の存在をアピールして押すべしとありました。ライバルに差をつけるんです」

「結構アピールしてるつもりなんですけど……」

「でも、その人は気付いていないでしょ？手代木さんは見かけによらず奥手なんです」

「そうですか……」

溜息をついた手代木は二本目のお茶をちびちびを飲み出した。

「あの、雪嶋さん」

「なんでしょう」

「雪嶋さんは恋人がいる人間を好きになったりしますか」

「なりませんね。浮気と言うことでしょ。子供っぽいと言われると思いますが僕はそういう不純なものが大嫌いです」

雪人が断言すると、手代木は少し元気になったように笑って見せた。

「なんか、未だ頑張れそうです」

「お互い、午後の仕事はきついですよね」

「……雪嶋さんって物凄い天然なんですね」

「天然？」

「いや、新たな一面を見れて嬉しいです」

「そうですか」

何のことだろうと小首を傾げていると、「雪嶋さん！」

「智くん」

通りかかって声をかけてきたらしい智と視線がぶつかる。

「もう直ぐお昼終わりますよ？一緒に行きませんか？」

「え、もうそんな時間なの。……手代木さん、済みません」

「気にしないでください。一緒にお昼が出来て嬉しかったです」

笑いかける手代木に笑みを返して雪人は弁当をしまった。

「あら～、僕ってお邪魔でした？」

「え？全然。手代木さんのお話も終わっていたところだったよ」

「いやいや、あの人は未だ雪嶋さんと一緒にいたかった感じですよ、あれは」

「そうかな。彼女からの手作り弁当をあんなに一気に食べちゃったから暇だったのかもね」

雪人が納得していると「雪嶋さんって可愛いですよ」

智が苦笑するので何のことかさっぱり解らない。

「雪嶋さん、その様子だと未だ告白されてないみたいですね」

「だれに？」

「手代木さんに」

雪人はますます訳が分からなくなった。

「手代木さんには彼女がいるよ？今日ね、凄い豪華なお弁当だったんだから。あれは手作りだった」

「……マジですか？」

確信を持って伝えると智は信じられないと言いたげな表情になった。それこそが雪人には信じられない。手代木ほどカッコいい男なら当然モテるだろうに。

しかし、とまたもや解らないことが起きた。

「彼女がいるのに、好きな人がいるってどういうことだろう……」

恋の相談の時は胸がざわついて深く考えなかったが、思えば手代木の考えが解らない。

彼女はイコール好きな人ではないのだろうか。

「智くん、社長のこと好きだよな？好きだから恋人なんだよな？普通そうだよな」

「い、いきなりなんですか。……そうですよ」

「だよなえ……」

手代木は今の彼女から心が移っているのだろうか。一目惚れした彼女に盲目になって、今の彼女を捨てるのだろうか。

「……………」

雪人は心が寒くなるのを感じた。

手代木の相談に体調が変化したような、くすぐったいものではない。深く深く、胸の中にしまい込んだドス黒い感情で掻き乱されそうになる。

「人間ってみんなそんな感じなのかな……」

一番最初に会った人間のことを思い出した。忘れもしない、簡単に心変りをしたあの男。

手代木とは似ても似つかないが、彼がそうだったらと思うと心が荒みそうになった。

第五話

魔物はある年齢になると社会勉強として様々な世界に赴任することになる。それは王と呼ばれる身分でも同じことで、しかしそれが人間の世界に決まった時、雪人は自分の運の悪さに思わず舌打ちしたほどだった。

雪人、と言うより冬の国の住人は人間にいい思い出がない。

それは何百年か前に、雪人の母親であった女王が人間に恋をして国と一族、そして雪人と直ぐ下の弟や夫すら捨てて人間の世界に住み着いてしまったからだ。

人間の作った昔話に、「雪女」というものがある。その原型になった雪女が雪人の母親だ。

雪の中で遭難していた男を助け、恋に堕ちた雪女。燃えるような恋情で結ばれた二人は末永く暮らしていくと思っていた。しかし、男は雪女よりも他の女に目が眩み、彼女を捨てた。

捨てられた悲しみは憎悪となって男を殺し、我に返った雪女もその悲しみから自ら炎の中に身をくべて命を絶った。

昔話ではどうなっているか雪人は知りたくもなかったが、実際はこういうことだ。

母親の身勝手な廃位に伴い、異例の弱冠にて王位についた魔力の強い雪人は当初、それでも周囲に文句を漏らすことはなかった。

自分たちが捨てられたということは確かにショックなことだったが、母親が強固な意思の持ち主であったことは知っていたし、夫である王とは恋愛結婚ではなかったと言うから、初めての恋に情熱を傾けても仕方がないと思っていた。

「幸せになってね」

何としてでも男と添い遂げると宣言して、周囲の猛反対を押し切って城を出る母親を、雪人は立场上表立っては応援できなかったが、別れ際にそう言って送り出した。

数年、母親は幸せだったのだろう。長くは続かなかった。

人間は自分たちに比べると命が儂い。それは解っているし、母親もだからこそ焦っていたのだろう。しかしながらそれが男の心変りで幸せが終わるだなんて誰が予想しただろうか。

知らせを聞いた時、駆け付けた雪人の前にあったのは、凍死した男の死体と、母親が身をくべた炎の柱だった。

その時、雪人は初めて見た人間と言う生き物が酷く憎らしいものに見えた。気は弱いが羞恥心以外はあまり起伏のない雪人だったが、暫く国の天候が荒れるくらい、人間について憎悪を持った。

だから人間の世界で働くことは躊躇われた。

王は多忙を理由にその職権を駆使して一度だけ拒否権を行使することが出来る。しかし、雪人は使わなかった。

躊躇われたが、母親が亡くなってからもう何百年も経っていたし、憎む気力すら人間に使いたくはないと思っていたからだ。

それに、憎らしいがああ男は雪人にとって細やかなプレゼントを遺していた。

雪人には妹がいる。

父親との間には雪人と弟しか子供はいなかったが、母親は人間の男との間に女の子の子供をもうけていた。

二人が悲惨な最期を遂げた後、周囲を見回った雪人が見つけたその小さな命を雪人は魔物の世界へと連れ帰った。

あの男の子供など、引き千切って捨ててしまえとこれまた周囲の反応は残忍だったが、雪人は半分魔物の血を引いてしまっているその赤子が人間の世界では生きられないことを知っていた。その子に自分の力を分けて、魔物として生きられるようにした。

可愛いその子は雪人にとって宝物だった。直ぐ下の弟も本来はクールだが、その子にはメロメロである。

かくして、その子のこともあり人間について興味もわいてきた雪人は人間の世界で働くことになった。

職種が金融業なので汚い一面ばかりではあったが、親切な人間もいるし、智のように自分たちの本性を知っても全くと言っていいほど動じない凄まじく心の広い人間もいるし、手代木のような気のいい人間もいる。

「ワタシたちの間でも、浮気はそんなに珍しくないでしょ」

実は向こうに夫が五人いる蘭林は平然とそういうことを言う。

「珍しくないけど、俺は智一筋かな。純愛、最高でしょ」

神妙に持論を唱える神坂が、向こうにいた時は食っては投げを繰り返したと智にチクる勇気があるものは誰もいない。

「恋人がいるのに他の女に目が行くって言うのは仕方ねえよ。それはオスとして当然だと思うね。少しでも上物がいればぴょんって跳ねる勢いでさ」

「みくりん、それ奥さんの前って言えるんだ？」

「……無理かな」

勇ましく発言したのにしょぼんとなった御厨はお茶をすする。

「でもそのお友達、未だ浮気がケッテイしてるわけじゃないでしょ。お雪はそういうの、ピンカンダカラネ」

「ランランが奔放過ぎるんだよ。うちの国は多夫多妻制とかじゃないから」

「……そのお友達、さん？どうして雪嶋さんにそんな相談したんですかね。と言うか、そもそもそれは相談なんですか」

智が何かを堪えるように肩を震わせて問いかける。

実は、スチャラカの三時休みに雪人が暇な社員に手代木の名前は伏せてお昼休みでの出来事を相談していたのだ。

困っている様子で相談してくれたのに、自分はいいいアドバイスをあげられなかったと雪人は反省し、自分より上手な社員の面々から意見を訊いている。

しかし実際は雪人が手代木のことを言っているというのは本人以外には周知の事実だった。

雪人に近付いてくる人間なんて、手代木しかいないとみんな思っている。彼がモテないわけではない。定期的に行動範囲を変えていても、百年も人間の世界にいれば好意を抱かれても不思議

ではない。でも、雪人はあまりそういうことに頓着がなかった。そして彼を覆う神秘的と言ってもいい雰囲気は特攻してこようとする男女の気力を不思議と殺いでいて、今まで彼の関心をこれほど惹いた人間はいなかった。

「相談、だったと思うよ？なんか切羽詰ってた感じだし」

「……雪嶋さんって可愛く鈍いですよね」

「どういう意味？智くん」

「お雪、お前は人間を好きになったりするか？」

小首を傾げる雪人に遠藤が投げかける。それに対し、雪人はふむと考え、真っ先に何故か手代木の顔が浮かんだ。

何故、手代木の顔が浮かぶのだろう。爽やかな笑顔が浮かんで胸が苦しくなる。自分を見詰める真っ直ぐな瞳にじりじりと焦がされていくものを感じる。

低く柔らかな声が自分の名を呼ぶと、何だかきゅんとした。

しかしその正体が何なのか、雪人は知らず不思議に思うばかりだった。

「お雪？」

「……好きにはならないと思います。智くんがいる前であれなんですけど、僕は人間に好意を抱くことはあっても恋愛感情は持ちませんよ」

母親の件があって、雪人は恋だの愛だのにはいい印象がない。多分、婚姻は結ぶだろう。しかしそれは人間相手ではないと思う。

「お雪は真面目だからな。まあそういうところも彼には評価が高いんじゃないかな。……お雪。女はともかく、男はどうだ？」

「男の人、ですか……」

人間の一部分とは違い、魔物は同性でも結ばれることがあるのでその辺の認識はかなりゆるい。おまけに問うてきた神坂自身、男の上に人間である智と恋に堕ちているので雪人も否定的ではない。

「愛があれば性別なんて、些細なことですよ。社長が常々言ってることじゃないですか」

「雪嶋さんもその点は人間の僕とはハードルの高さが違いますよね……。まあ、僕も腹を括っけますけど」

「人間が囚われ過ぎなんだよ。まあ、彼も思い切ってる感じだけどいまいち押しがまだ弱いんだよね」

「あ〜、あの外見だと押したことってあんまりないんじゃないっすか？普段が入れ食いだから口説くのは苦手そう……」

遠藤がもっともなことを言うと、「そういう初心な男もクイガイがありそうねえ」

蘭林が目を輝かせる。

「ランランの毒牙にかかるか、こっちが崩落されるのが早いか」

「賭けるか？……と言ってもランランは一回敗北してるからな」

御厨がサイコロを振るような仕草をすれば「もう！おじさんの意地悪！今度は失敗しないわよ」

蘭林が使わなくてもいい色目を御厨に向けて甘い声を出す。

そこで、雪人は自分の相談があらぬ方向に向かっていることに気付いた。

「あの、みんな。一体何の話になってるの？僕は友達について相談してるんだけど……」

話題が掴めないと混乱している雪人を見て、一同はうんうんと訳知り顔で頷いた。

「雪嶋さん。鈍って可愛いけど、あんまりそれだと本当に可哀想だから。察する能力をつけましょう？」

「え？」

「お雪、男同士でも楽しむやり方が知りたかったら俺に言え。ひっそり向こうにアドバイスをしておく」

「何の話ですか、遠藤さん……」

「お雪ちゃんは心底人間が嫌いってわけじゃないんだし、愛があればそこは許容できるよな。俺のかみさんも人間だから、気軽に相談してくれよ」

御厨に肩を叩かれても、雪人は何が何だか解らなかった。

第六話

クーラーが故障した。今回は雪人のせいではなく、蘭林が一人なのを良いことにお客といけないことをして、その時に彼女が無意識のうちに飛ばした鱗粉によって目詰まりしたせいだった。

「小一時間もすれば直りますよ。今日も暑いから買い替えが必要にならなくてよかったですね」
手代木は小さいバキュームと工具を片手に部屋の隅で作業に取り掛かった。

仕事をしながらその様子を見ていた雪人は、故障が自分のせいではないので少し気分が軽い。
一方、職場で致した罰として蘭林は向こうの世界で見世物小屋に入れられ、一週間は戻ってこられないそうだ。蘭林はかなり珍しい柄の蝶でもあるので向こうでも需要がある。

「ポケットマネーが増えた」

「アクドイ……」

秒速でお金が溜まっていくのを確認している神坂に、飽きれている智。他の社員は例の如く出払っている。

「さてと、……俺と智は飲み物を買に行ってくるよ」

「僕が行きましょうか」

「いいのいいの。お雪は手代木くんと一緒にいて」

妙にニコニコしている神坂が、これまたニコニコしている恋人の手を引いて会社を後にしてしまった。

「二人とも仲がいいなあ……」

ラブラブだと雪人は感心する。その様子を見ていた手代木も頬を掻く。

「あの二人って、やっぱり付き合ってる、っていうので合ってるんですね。……ライバルじゃないのかな」

「え？ええ、そうですね。かなり珍しいカップルなんですけど」

魔物が正体を知らせずに人間と婚姻を結ぶことは結構ある。自分の母親や御厨もそうだ。

しかし智が神坂の何処までを知っているかは解らないが、魔物であるということを把握して付き合っているのはなかなか珍しいケースだと言える。

「やっぱり雪嶋さんも男同士って言うの、抵抗があるんですね」

「え？いや僕はそういうのは気にしないですよ」

手代木が見当違いのことを言うので雪人は首を振った。すると彼はちょっとホッとしたように表情を緩める。

「じゃあ自分が男と付き合うことは想像したことありますか？雪嶋さんは、……女の方が好きなんですよ」

「ん～、僕は人間とは付き合ったことがないので、性別の前に想像がしづらいです」

「え？付き合ったことがないんですか？」

雪人が頷くと、手代木は目を丸くしていた。

国では雪女と付き合ったことはあるが、人間とはない。そういう対象で見たこともない。雪人は何か変なことを言ったかと反芻したが思い当らなかった。

「雪嶋さんって美し過ぎて高嶺の花みたいなものなんでしょうね」

なんか挫けそう、と手代木が溜息をつくので、作業が難航しているのかと雪人は心配になった。

「休憩します？」

「いえ、今近付いたら何をしでかすか解らないのでこっちに集中します……」

何を言っているのか、雪人はパソコンから目をあげたが手代木の表情は解らなかった。

「思い切って話の続きをしますけど、もし、もしも男に告白されたら雪嶋さんは気持ち悪いって思いますか？」

「人間はそういう観念が強いみたいなんですけど、さっきも言いましたが僕は男同士でも当人たちが違和感を感じなければありだと思いますよ」

現に神坂と智、遠藤と近江が同性同士だ。彼らは本当に仲睦まじいし、後者のカップルについては人間で言えば金婚式にあたるくらい長く付き合っている。

「……でも、失礼だけど人間は心変りをするので、僕は永遠とか言うのはちょっと懐疑的かな」

魔物は身体は奔放ではあるが心は一途なものが多い。奔放の見本ですらある蘭林にも最愛の夫がいて、心だけは彼にあると常々言っているくらいだ。

それに比べて、人間は心も浮気をする。

気持ち沈んでしまった雪人をどう見たのか、「そりゃ、俺も永遠とかは言い切れないけど、今の気持ちがその人だけにあるって言うのは自信を持って言えますよ」

穏やかに言った。

「心変りにもいろいろ種類があると思うんです。どうしようもなく惹かれあっても、その愛情ですら太刀打ちできないくらいの価値観の差があって心が擦れ違って、心変りしてしまったりすることもあると思います」

手代木が言うことは確かにそうだが、雪人としては納得できるものではなかった。

「埋められない価値観の差があるのなら、心変りをしてもいいということですか？そのことに罪はないということですか」

母親のことを思い出した。

人間の男に恋をして、そして裏切られ自ら命を絶った。

生まれたばかりの子供すら遺して嘆き悲しみ、炎の中に身をくべた時の彼女の心境は想像を絶しているだろう。

「心変りで命が亡くなっても、それは罪ではないんですか。それはどうしようもないとか、心が擦れ違ってしまったから仕方がないとか、そういうことで済まされるものなんですか」

「雪嶋さん……？」

手代木が戸惑う声をあげても、雪人は気付かなかった。

酷く気分が悪い。まるであの惨状を目の当たりにした時のように、目の前が赤く染まっていく感覚に襲われる。

「……済みません。気にしないでください」

席を立てて洗面所に向かおうとした腕を掴まれる。そのまま引き寄せられて、雪人は手代木の

胸に抱き込まれてしまった。

「何か、辛いことを思い出させたみたいですね。……済みません」

「手代木さんのせいじゃないです。僕の個人的な感情でした。気にしないでください」

だから離してくださいと言おうとして、見上げた手代木の表情は酷く切なく、そして甘くて雪人は言葉を失った。

「手代木さん……？」

「何が雪嶋さんにそんな辛い顔をさせているか、俺には解りません。不用意に探りを入れてしまったせいでもあると思うと自分を殴りたくなります」

「だからそれは」

「でも、俺の気持ちは変わらないです」

「気持ち……？」

何度も見た真剣な手代木の目が、雪人を射抜いた。綺麗だと、見とれていると唇に柔らかいものがあたった。

それが手代木の唇だと気付いたのは、啄むような二度目ではなく、薄く開いた口腔に舌が差し入れられた三度目のことだった。

「……………んっ」

初めて人間にキスをされた。思わず目を閉じた雪人をどう思ったのか、手代木は角度を変えて舌で蹂躪してくる。彼は雪人の身体や舌が冷たいことに違和感を覚えているようで、少し眉を寄せているが雪人を離すどころかキスを深くする。

ちゅちゅっと互いの唾液の音がして雪人の口の端から嚙下し切れないものが垂れて濡れる。

雪人は動転していて硬直していたが、手代木は気にせずに彼の口腔を味わった。

息苦しいと雪人が朦朧としてきた思考で手代木の腕に爪を立てる。ようやく我に返ったらしい手代木は雪人の唇だけを離れた。

濡れた音がして、雪人は頬を染める。

同時に、じわじわと恥ずかしさがやってきて部屋が氷結状態へと向かっていく。しかし今回は手代木は何も感じないのか、雪人を深く抱き込んで耳元に唇を寄せた。

「好きです」

「……え？」

簡潔で短い言葉なのに、雪人は理解が出来なかった。

見上げた手代木は少し恥ずかしそうだった。

「雪嶋さんはハッキリ言葉にしないと解りそうにないなってこの間思ったので、言葉にしてみたんですけど、未だ解ってもらえなかったみたいですね」

キスまでしたのに、と手代木は笑って、もう一度好きだと雪人に告げた。

「返事は直ぐじゃなくてもいいんです。考えてくれるだけでもいいですって、キスしちゃってこんなこと言うのは卑怯だと思うんですけど、腕の中に雪嶋さんがいるっていうシチュエーションで我慢が出来なくて」

過ちではないので謝りませんがと言う手代木に、雪人は頭の中が真っ白になった。

人間とした、初めてのキスで初めての告白。もうパニックだ。

身体が離れたのにも気付けないくらい、雪人は呆然としていた。

「……神坂社長たち、遅いですね。俺、見に行ってきますよ」

「……………」

流石にいたたまれないのか、手代木は足早に出て行ってしまった。それは自分の仕事ではないかと雪人はそんなこと思う正常な思考回路もない。

「どういうこと……？」

触れた唇には、確かに手代木に与えられた熱が籠っていた。

第七話

恋愛に免疫がない雪人は見事に苦悩に陥った。

手代木のことをそういう対象としてみたことがなかったので考え直してみる。

確かに彼はいい男だ。見かけだけでなく、穏やかで優しいところもあるというのは雪人も短い付き合いながら解る。そんな彼に真っ向から好意を寄せられて、戸惑いよりも大きかったものは喜びにも似たくすぐったい感情だった。

「それは恋の感情だよ」

身に起きた出来事を思い切って告白すると、魔王陛下はおっとりとした口調ながらも断言した。

本来ならば近づくことすら出来ない尊い御身である魔王陛下とこんなことで言葉を交わす間柄になるとは、長く生きていれば驚くことも多くあるものだ。

きっかけを作ったのは他でもない、智だった。

「手代木さん、遂に告りましたか」

「え、智くんのその把握していましたが的な感じはなんなの」

その智は魔王陛下のお気に入り、智が煎れた日本茶をこよなく愛している。今も、ふらりとやってきては会社の一番豪華な椅子に長い足を組んで座り、お茶を楽しんでいる。

「その男はお前の母親を捨てた男とは違うのだろう。信じてみるのもいいのではないか」

「お言葉ですが、陛下。信じてのめり込んだ時にどうにかなってしまいそうで僕は自分が怖いです。それに、僕は母のように自分の正体を偽って彼を想うことが出来るとは思えません」

恋愛は狂気にして凶器である。

母親がそうであったように、雪人は自分が手代木と結ばれた時に彼が心変わりでもした時に何かしでかしてしまうのではないかと自信がなかった。恋と言われて真っ先に浮かんだ不安はそれで、次は自身が人間ではないという根本的な問題だった。男同士と言うだけでも手代木にとってはハードルが高いのに、まさか異種になるなんて彼は思っても見ないだろう。

「智。お前は築の正体を知った時、どう思った？怖かったか？恐ろしく嫌悪したか？」

魔王陛下の声はまるで美酒のように酔えるほど美しい。

「いいえ。特に何とも思いませんでした。ここにお世話になる時の出来事が出来事で、おまけに普段が変態なのでもはや人間ではなくても不思議ではないと思いましたし」

身もふたもないことを平然と言ったのける智は、人類最強ではないかと雪人は尊敬すら覚える。

「お前も少なからず好意を抱いている人間から告白されて、悪い気はしないのだから己の正体を打ち明けてみればどうだ？」

「陛下、お言葉ですがそれで彼が立ち直れなくなったらどうするおつもりですか」

「それは私の知ったことではない」

「駄目ですよ、陛下」

バッサリ切り捨てた魔王陛下に智が溜息をつく。彼に躊躇いもなく意見できるのは智くらいだ

。困った顔をする智に、陛下は思案顔になって「ならば、これをやろう」

ひょいっと片手を振って小さな小さな瓶を出した。

「男に少しでも違和感を感じたら、この瓶の中身を振りかけるがいい。お前にとって不利な記憶だけを綺麗に消し去ろうぞ」

「陛下はどうあっても打ち明けさせたいわけですね」

「その方が面白いと思わないか、智」

「まあそうですが」

魔王陛下の唇がニッと吊り上がる。真っ赤なルージュが妖艶で、蠱惑的だ。この場にいるのが苦悩している雪人と、魔王陛下の伴侶である女王陛下から抵抗できるように印を貰っているがために何とも思わない智以外だったらあらゆる煩惱が掻き立てられ心の瞬殺は免れないだろう。

「恋と言うのは素晴らしいな、智……」

この前、女王陛下との何千回目かの結婚記念日を迎えた魔王陛下はほうっと溜息をついた。仕草がいちいち色っぽい。

「雪嶋さん、手代木さんと個人的に連絡は取ってないんですか？」

「ああ、うん。だって必要ないじゃない」

「そうですけど、……じゃあ告白されてから一度も会ってないんですね」

あの時、手代木が消えてから雪人は部屋を一回氷結させてしぶしぶながら帰ってきた神坂にまたチョップを食らった。直りかけていたクーラーは基盤がむき出しだったところに氷の浸食を受けたので直るわけもない。

その光景を手代木がどう思ったか解らないが「この部屋はブリザードでも吹くんですか」

冗談だと思うがそんな軽口を言うので心の中で叫び出したくなるような申し訳なさに駆られながらも、雪人は愛想笑いを浮かべているだけだった。

「智。その男はどうすればここに来るんだ？」

「電化製品が壊れれば来ますね」

「ほう……」

魔王陛下が一つ瞬きをすると、照明以外の電化製品が音を立てて破壊された。

「やりすぎです、陛下……」

メンテナンスされたばかりで輝き誇っていた電化製品たちへのあんまりな仕打ちに雪人が呆然とし、智が頭痛がしてきたと額に手をあてても無敵の魔王陛下は気にしていない。

「さあ、男を呼べ。私も顔が見てみたい」

「や、それは駄目です。陛下、そういう大切なことは二人っきりじゃないと駄目です」

「そうなのか……？」

「上手くことが運んだら素晴らしい思い出になります。告白記念です。記念と言うのは二人きりで大切に共有するものです。陛下だって女王陛下と二人きりでいる時に誰かが割り込んできたら嫌ですよ？」

智に言われて、魔王陛下はまた思案顔になった。

「そうだな。あれは何かと二人きりと言うのを大事にしたがる。私が智を寝台に連れ込んだ時は

烈火のごとく怒り、その夜は私のことを半ば無理やり」

「話さなくていいです、陛下。解ってくださればいいです」

真っ赤になった智が何を制止したのか雪人は自分の問題をそっちのけで気になってしまった。いけない想像で羞恥心が募り、部屋の温度が下がっていく。

「しかし気にはなる。事後報告はしてくれるな？」

「はい、致します」

魔王陛下の尊い白い指に触れないように恐る恐る小瓶を受け取った雪人はコクコクと頷いた。そこで、自動ドアが開く。入ってきたのはサングラスをしてレザースーツを着こなした若い男だった。

「女王陛下、いらっしゃいませ」

「もー、最初はいつも女王陛下って言うなあ。アイデアだよ、智」

「遅いぞ。智のお茶が冷めてしまったではないか」

文句を言って男である女王陛下のアイデアを睨む魔王陛下はお茶菓子をつまむ。

「陛下にはお代わりと、アイデア陛下には煎れたてを持ってきます」

「サンキュー。ユキ、久し振り～」

「御久し振りです、女王陛下」

雪人が緊張で声を震わせながら挨拶すると、アイデアがサングラス越しに目を笑わせたのが解った。

「うちの旦那さんにイジメられなかった？昨日意地悪してから機嫌悪いの、この人」

「とんでもありません。勿体ない素敵なアドバイスと、菓をいただきました」

魔王陛下は澄ましてお茶を待っている。

「なにに、媚薬でも貰った？俺はおススメしないよ？薬で気持ちよくなっても心はイケてないって感じ」

「からかうのも程々にしろ。そんなものを独り身にやるわけがなからう」

お代わりに手をつけた魔王陛下が言うと、「え～？独り身だから自分で使うっていうのもありじゃん？夜な夜な独りで盛っちゃう、みたいな」

「下品な……」

真っ赤になった雪人に呼応して部屋の温度は遂に氷点下に達し、給湯室にいた智は黙ってコートとカイロを身につける。

「お前が来る前までユキの素敵な恋の話で盛り上がっていたと言うのに、台無しだ」

昨晚のこともひっくるめ出したのか、どうやら魔王陛下は機嫌が悪くなっただけらしい。

「怒らないでよ、旦那さん。今日ほうんと甘やかしてドロドロに溶かすサービスするから許して？」

どちらかと言えば細身な魔王陛下よりも上背もあり、体格もしっかりしているアイデアが可愛らしい声を出すのは傍から見れば怖い以外の何物でもないが、不思議と気持ち悪くはなくむしろ蕩けるような感覚に襲われる。

手代木に恋をしていると自覚させられた雪人ですら、不遜にも二人に対していけない想像をし

てしまいます赤くなっていく。

「お茶が冷めるので冷静になってくれると有難いのだが？」

「も、申し訳ありません」

熱々の新しいお茶に手をつけた魔王陛下は「築が楽しみにしている最近の変化、私も一枚噛めて嬉しいぞ」

そう言って妖しげに微笑んだ。

第八話

魔王陛下によって破壊された電化製品を見せると、手代木は流石に頬を引きつらせた。

「御免ね、手代木さん。ちょっと乱闘があったんだよ」

「……怖いですね、世の中って」

「そうなんだよ。怖い怖い。で、ちょっと相談があるんだけど」

廃棄物になってしまった電化製品を車に積み込んでいる手代木を、神坂が呼び止める。

「うちの可愛い経理ちゃんがお金を捻出してくれてね、電化製品をまた一通り揃えようと思うんだ。うちの人間はそっちの方面は詳しくないから、今までは業者に任せっぱなしで金額も確かめてなかった。でも今回は安く買えるならそっちの方がいいから、電化製品のプロである手代木くんの意見が訊きたいんだ」

「え、俺の意見ですか……」

「だって、うちの担当は君だし、これから壊れた時にも君が見やすい機械の方が修理も楽だろう」

戸惑う手代木に神坂が無言の圧力をかけているように雪人には見えた。

「悪いけど、週末にでも電化製品の買い付けに行ってくれないかな。雪嶋と」

「は？」

「……………」

思わず声をあげた雪人。手代木は無言だ。

「電化製品を一番壊す雪嶋が担当するのは当たり前じゃないか。……まさか、嫌だとは言わないよな、お雪？」

ちらっと雪人に向けられた視線は物凄く怖かった。雪人は無闇に頷いて見せた。

手代木は少し気まずそうにしていたが「解りました。予定もないので、土曜日なんてどうですか」

振り返ってスケジュールを確認するように雪人に問う。

「だ、大丈夫です」

かくして、二人きりで出かけることになってしまい、雪人の混乱は極まった。

「……どうしよう」

手代木のことは好きだ、と思う。しかし未だ自分の正体を打ち明ける勇気がない。

右往左往している間に週末が来て、雪人は待ち合わせた時計台の下で溜息をついていた。

買い付けと言っても正式な仕事ではないからと、神坂に私服を厳命されたので今日の雪人の服装はスーツではなくカジュアルなものになっている。

周囲は小麦色の肌なので貧弱な白い肌を出したくなくて薄い水色の七分丈こそ着ているが素材は麻で、合わせたパンツは半端丈のベージュのチノパンだった。靴はスニーカー。

普段は後ろになでつけている銀髪はさらりと流れ、額を覆っているので少し幼さが出る。陽射しが強いので濃い色のサングラスをかけた。

「済みません、遅くなりま……」

後ろから声をかけられて振り向くと、手代木が目を見開いて固まっている。

「どうしたんですか？」

雪人が上目づかいに見ると、手代木は口元を押さえてごによごによと「ふ、普段とイメージが違っていい感じですね」

ギャップ萌え、と不明な単語を口走って赤くなっていた。

「今日は御世話になります」

「いいえ、俺の意見が参考になればいいんですけど」

隣を歩くと手代木もいつもと違う格好をしていて、何だかそわそわしてしまう。

白い半袖のシャツにストライプの入ったベスト、ダメージジーンズで靴はカジュアルな革靴。カッコいい人は服のセンスもカッコいいのかと感心してしまう。

「雪嶋さん？どうかしました？」

「カッコいいなって思って」

「・・・・・・・・」

言われ慣れているだろうに手代木は瞬きを繰り返して、それからふわっと笑った。

「雪嶋さんに気付いてもらえるとは思いませんでした」

「手代木さんは普段からカッコいいです。言わないだけです」

つい拗ねてしまうと手代木はまた笑った。

目的の大型ディスカウント電気製品量販店につくと、「この季節のクーラーは覚悟しないと駄目ですよ。例年より暑いから、クーラーの需要が高くて安いものは売ってません」

手代木はフロアを確認しながら雪人をエスコートする。

「智くん、頑張ってくれたなあ……」

スチャラカの金庫番である智が気付かないところで節約をしてくれて捻出してくれた有難いお金をぎゅっと握りしめる。本業の方で十分過ぎるくらいの利益がある会社だが、それは当然の如く税務署に申告できるわけがないお金なので自由に使うことは出来ない。今持っているお金は純粹に金融業だけで儲けた利益なので有難さもひとしおだった。

一番のネックだったクーラーは手代木の意見に従ってやや高級なものを買った。しかし性能は値段以上のもので、しかも簡単な氷結だったら自分で何とかするという、雪人にとっては画期的過ぎる能力があった。

「有難う御座います、有難う御座います。これで社長に叩かれないで済みます」

日増しに威力が強くなっている感じのする神坂の愛のムチに密かな脅威を抱いていた雪人はペコペコ頭を下げた。

「神坂社長、雪嶋さんのこと直ぐチョップしますよね。あれは癖なんですか？痛がってる雪嶋さんは可愛いけど可哀想だし、ちょっとムツとするんですよ」

「あれは～、僕が悪いわけで、社長は悪くないんです。ただやり方が乱暴なだけで」

お恥ずかしいと頬を染める雪人の小さな頭を手代木がやんわり撫でる。

「こんな美人にあんなことするなんて、いくら恋人に盲目的でも俺は解らないな」

「そんなこと言うの、手代木さんくらいですよ」

雪人がはにかんで笑うと手代木もつられたのか笑ってくれた。

電化製品を一通り揃えたら昼になっていて、雪人は手代木を昼食に誘った。わざわざ休日を割いてもらっているのだからそれくらいのサービスはするものだとは解っているし、神坂がポケットマネーから幾ばくか支援金を出してくれたのもある。

「雪嶋さんって結構美食家ですね」

お腹がいっぱいになって、外の景色を見ていると手代木が感心したように言うので「だって、折角食べるんだったら美味しいものがないでしょ？」

雪人は応えた。手代木も頷く。

「でも俺は結構な偏食なので今でもお昼は手作りですよ」

「ああ、この間のお弁当」

そこで雪人は色とりどりの弁当を思い出し、それを作っただろう女性の影を思い出した。

あの時に相談してきた手代木の好きな人、というのは自分のことだったみたいだが、彼には弁当を作ってくれる間柄の女性がいるのに、どうして雪人にも視線を送るのか。

混乱が顔に出ていたのか、手代木は小さく笑った。

「最初に言いましたよね、彼女が出来ないって。原因はあの弁当なんです」

手代木の女子力が高い弁当は、当人の手作りだった。偏食がたたって仕出しが食べられなかった学生時代から手作りしていた料理にはまってしまい、今では周りから引かれるくらいファンシーな弁当をこしらえるようになってしまっている、とのこと。

「みんな俺の弁当を見ると、負けたわって言って近寄らなくなるんです。弁当男子っていう言葉が昔流行ったんですけど、俺のは乙女系みたいでカッコいいものではないし」

「そうですか？でもこの間の兎の形をした林檎は可愛かったですよ。飾り切りしてあったきゅうりも美味しそうでした」

「もしよかったら今度、雪嶋さんの分も作らせてください」

ニッコリと笑う手代木に、雪人も笑い返した。

彼女疑惑が晴れて心が清々しい。そして、独り身であることがしっかり解り、想い人は自分なのだとは雪人は俄かに緊張してきた。

自分も手代木のことが好きだ。だからこの間の答えを言わなければならない。

すっと立ち上がった雪人は誰もいない座敷なのを良いことに密かに告白してしまおうと手代木の傍らに行こうとした。

しかし、「うわっ！」

掃除の行き届いた畳の上で滑ってしまい、それを受け止めようと手代木が腕を伸ばした。

「いたたた……」

柔らかいものの上に着地できたがしたたかに胸を打って身体を起こすと、至近距離に手代木の顔があった。

「雪嶋さん……」

手代木の表情が甘い。頬に触れられて、その体温が心地いい。薄い彼の唇が言葉を紡ごうとして開きかけ、舌が覗く。

この唇と舌が自分を苛んだんだと雪人は自覚して、突如最大級の恥ずかしさに襲われた。

「えっ？うわ、寒いっ！」

思わず叫んだ手代木の目の前から、雪人は大量の氷を残して姿を消した。

「お兄様、入社しなくてよろしいの？」

妹が部屋の前で問いかけても、雪人は何も返さなかった。

立ち去る気配がして、ホッとして布団にくるまる。まるで引きこもりのような状態だが、雪人はもうそれでもいいと思った。

手代木に正体をはっきり伝えたいと好きだと言う大事な想いも伝えようと思っていた。

しかしあれでは雪人が人間ではないということは丸解りだ。

普通の人間は思い出して恥ずかしくなった時に氷を大量発生させて姿を眩ませたりしない。あんまり生々しく思い出してしまったためにああするしか方法が浮かばなかったのだ。そんな自分はずつづく馬鹿だと雪人は溜息をつくしかない。

そして、初めての恋が両思いだったにもかかわらずお互いで確かめる間もなく終わったことに涙が出てくる。

こんなぐずぐずの状態を見せるのは可愛い妹には出来はしない。

実際のところは雪人の国は大量の水分を含んだ猛吹雪に襲われて酷い状態なので、雪人に何かあったことなんて妹を始め、そこらを歩いている旅人にすら解るくらいだったが。

「無断欠勤になっちゃうな……」

神坂の愛のムチが激しくなることは火を見るよりも明らかだが、精神状態がこれでは、折角搬送されるはずの電化製品をまた壊しかねない。

修理が必要になったら手代木が呼ばれることになるので、嫌でも顔を合わせる。

手代木はきっと雪人を恐れるだろう。怯えの混じった視線で見られるのが怖かったし、耐えられない。

その時のための薬を魔王陛下に貰っていたのに、もう手代木の前に姿を見せる勇気すらないのだから使えるわけがなかった。

「僕の意気地なし……」

すっかりしょんぼりした雪人は貧乏揺すりをしながら時間が過ぎるのを待った。

「……………」

どれくらい経ったのか、ふと目を閉じている間に眠ってしまったようで、ドアのノックで意識が浮上してきた。

「お兄様、お客様が来ていらっしゃるわ」

「……今日は誰とも会いたくないよ。悪いけどお引き取り願ってくれ」

まさか神坂がここまで来たのかとビクビクしたが、雪人の傷もそんなには浅くない。ここは独りになってやるんだという変な志で、頑固にも布団から出ようとしめない。

「困ったお兄様ねえ。でも会わないと後悔なさると思うから、スペアキーを使わせていただくわ」

「え、ちょっと！」

傷心の兄のことを少しは気遣ってくれてもいいじゃないかと慌てたが、ぎゅっとだんまりを決

め込もうとして雪人は身を固める。

冷たい布団の上から、確かに腕の暖かな感触がした。これは魔物のものではなく、明らかに人間の温もりだった。

「……なんで……」

上手く振り向けなかったので顔は見えないが、それが手代木の腕であることは嫌でも解る。

「なんで、あなたがこんなところに」

「そりゃ、いきなりいなくなったらビックリするじゃないですか」

「……いや、今は僕の方がかなりビックリしてますよ……」

何せ、ここは人間の世界ではない。オール魔物の世界なのだ。おまけに温度が氷点下の更に下をいっているくらいの氷の城に、人間がいることなんて有り得ない。

「雪嶋さんが人間についてあんまりいい印象を持ってないことは、妹さんから聴きました。それでも俺のこと、嫌いじゃないって思ってもいいんですよね……？」

震える雪人の指に指を絡め、耳にかかる手代木の吐息がやけに熱く感じられて、溶けてしまうのではないかと思った。

「雪嶋さん、もう何処を凍らせてもいいですから、答えてください。焦らされるのはどうにも堪えます」

雪人は今更ながら自分が人間ではないことも手代木が把握している事実には戸惑う。

「僕、……男で、しかも人間じゃないんですよ。手代木さんは怖くないんですか。ぼ、僕は魔物で、あなたを簡単に殺してしまう力だってあるんですよ」

声が否が応でも震えてしまう。しかし手代木はくすっと笑った。

「だから何です？俺、結構な決心をしてここに来たんですよ。猛吹雪の中で何時間も歩いたんです。引き返す機会は何度もあったし、神坂社長からも無理はするなって言われました。でも、今ここにいるんです。その意味が解ります？」

雪人はもそもそ首を振った。手代木の腕の力が強くなる。

「雪嶋さんが男って言うことは一目惚れした時点で気にしてないです。人間じゃないってことも、この際どうだっていいです。……俺が心変わりしたら、その時は殺してくれて構いません」

「殺していいなんて、そんな、簡単に……」

思わず布団から顔を出した雪人の視線を受けて、手代木は目を細めた。

「それくらい、雪嶋さんが好きなんです。自分でもおかしいなあって思うんですけど、あなたになら殺されても本望だなんて。もうこれは恋に堕ちた時に覚悟出来てるって感じだったと思います」

俺はあなたをずっと好きでいる自信があるって言えますと、雪人を真っ直ぐ見詰めて口説く瞳はやっぱり綺麗で、雪人が思わず抱き付いて後ろに引っ繰り返って帽子に隠れてしまったけれど、キラキラ笑っているようだった。

「帰りませんか？あの、出来れば俺の部屋に……」

「え……」

お誘いに顔を赤くした雪人は部屋に氷をまき散らしたが、今度は逃げなかった。

「いや～。俺、北海道より寒いところとかどうなることかと思ったんですけど、愛があればなんてことないですね」

初めてベッドを共にした翌日、手代木は白い息を出して欠伸をした。

季節はまだ夏の真ただ中。決してクーラーをかけ過ぎていて寒いわけではない。天然のクーラーのおかげで部屋は氷点下まで室温が下がっている。

「済みません、済みません……」

雪人はひたすら謝るしかない。

手代木は神坂から貰ったという、防寒対策だというブレスレットをしているので、通常の間人よりも寒さの耐性が身についているらしい。それでも肌寒さは感じるらしく、寝間着は真冬用のものだった。

一方、雪人の手首にあるブレスレットは逆に雪人の身体をより人間に近付けるものらしく、ベッドの中で手代木を受け入れる時にその熱さで溶けてしまわないようにと配慮されていた。おかげで雪人は溶けずに済んだが、別の意味で溶かされて、思い切り甘やかされた。

「雪嶋さん、無断欠勤ですよ」

「はっ！そうですね、……うう、頭くらいはたかれるかな」

「……愛のスパルタ教育って素敵だと思いますけど、俺は恋人が他の男に触られるのも本当は困るんですが、ひっぱたかれてるのはもっと嫌で見たくないんで神坂社長にイジメないでくださいってお願いしておきました」

「重ね重ね有難う御座います」

優しい人だと雪人が涙ぐみそうになっていると頬にキスされた。部屋に涼しい風が吹く。

「雪嶋さんって本当に免疫がないんですね。昨日は雪の重みで床が抜けるかと思いましたよ」

そこも可愛いので構いませんよと言われて、雪人は返事の代わりに部屋に小さな霰を降らせた

。

「抱き締めてもいいですか？」

「は、はい……」

どうぞと身体を差し出すとぬいぐるみのように抱き締められて幸福感が全身を駆け巡り、雪人はうっとりした。

「俺より物凄い年上なのに可愛過ぎてどうにかなりそう……」

手代木も幸せいっぱいと言う感じで雪人の身体をぎゅうぎゅうする。

すると、身体が反応してしまったのか少し気まずそうに目を泳がせた。

「手代木さん……？」

「あの、済みません。もう一回いいですか……」

こういう時だけ察しがいい雪人は部屋を氷結させながらもぎこちなく頷いた。

「この部屋の電化製品も買い直さないといけなくなりましたね」

「また二人で見に行きましょう。今度は正真正銘のデートです」

「……そうですね」

「その前にいっぱい愛させてください。出来れば、その後も……」

「はい……」

ベッドの中に潜り込んだ二人は手をつないで身体を合わせた。

夏の陽射しが未だきついと言うのに、その日の幸寿地区だけには真冬並みの雪が降ったそうだ

。

「恥ずかしがり屋の雪の王様にも困ったものだな」

そう言って昼間っから雪見酒をしているのは、金融会社スチャラカぱらだいの面々だけだった。

一目惚れをする確率はどのくらいだろうか。

手代木篤志（テシロギアツシ）は恋愛についてさほど、運命めいた持論は持っていない。

しかしこれが運命の恋になるのではないかと言う予感は、今回ばかりはハッキリと感じ取っていた。

そんな運命を感じた恋の相手は、なんと男性だった。二十年以上生きてきて、自分がマイノリティな道に足を踏み入れるとは思っても見なかったが、真夏の道端で見かけてしまった彼はもはや性別の枠にとらわれることを嘲笑うかのごとく、手代木の心を簡単に射止めた。

彼、雪嶋雪人（ユキシマユキト）はまるで雪の化身のようにさめざめとした美しさを放っていた男性だった。彼が本当に雪の魔物であるというのは後々知ったことだったが、初めて目にした時から常人とは違うものを感じ取っていた手代木の認識能力は評価されるころだろう。

「社長、遠藤さんと連絡が全く取れないんですけど」

「諦めろ。今は近江と別件で行かせてる」

定期のチェック中、社長の神坂と雪嶋のそんな会話が耳に入る。

ここ、金融会社スチャラカぱらだいは前任者から聴いていたが本当に電化製品がよく壊れる

。

修理し甲斐があるが、こんなに頻繁にもなると怪しい感じがしてくる。普通の会社ではなさそうだなと、これまた察しのいい手代木は思うのだが、不思議と色んな業界からは変な噂は聴かない。それどころか、この会社の評判はかなり地味なものだった。

社長から社員の一人残らず美形なのに、どうして地味で通っているのか、好奇心がない人間でも駆り立てられるところだが、手代木は雪嶋の一挙手一投足を見詰めているだけで精一杯だったので大した興味も起きなかった。

それは初めて訪れた時に、蘭林香（ランバヤシカオリ）から誘惑された時もそうだった。手代木とて普通の男子であるので、魔性をまとった女性に触手が全く向かないわけではない。しかし、彼女に慎みを持ってとまで言うくらい、彼の頭の中には既に雪嶋のことしかなかったのである。

恋は盲目とはよくいうが、雪嶋が魔物だからだろうか、もう魅せられていると言ってでも過言ではない突っ走り方だった。

しかし、観察していればしているほど、雪嶋は何かにつけて神坂にイジメられている。

もしや神坂は雪嶋と出来ているのではないか。

邪推をして見ていると何だか心が落ち着かない。神坂には鷺沼智（サギヌマサトル）というアルバイト社員の恋人がいると解っていても、彼くらいの容貌なら二股も許されると勝手に解釈してますます落ち着かなかった。

「目の中に入れても構わないくらい可愛い可愛い智がいるのに、なんで俺がああ不安定破壊魔と浮気してるって思うんですか。お門違いもいいところですよ」

思い切って訊ねてみると、神坂は冗談じゃないと鼻で笑った。

「お雪は確かに美しいっていう部類のやつで、性格も悪くないと思いますが、俺は御免ですね。扱いにくい」

イジメているのは単なる趣味だと言われて、なんてやつだと思ったが、手代木は安心した。だからこそ、電化製品を買いに行ったときはデートみたいで嬉しいと思ったし、堅苦しいスーツ姿とは違い可愛い格好をしてきた雪嶋にときめきも倍増して心が浮足立った。

しかし、雪嶋は消えてしまった。

それは手代木にとっては未知のと遭遇だった。たった今、自分が身体で受け止めた雪嶋が忽然と姿を消してしまったのだから驚かすにはられない。

急激な寒さに襲われながら呆然と身体を起こして、周りが氷で固まっていることに気付いた。「あちゃ〜、あの馬鹿はまた請求書の山ですな。こりゃ」

この事態でも店の中は静まり返っているのに、独り声をあげたのはさっきまでいなかった神坂だった。

「ご心配なく。ここの周りの時間は一時的に止めてあります。この場の処理は俺がやって、後で諸々の請求を雪嶋にしておきますので」

取り敢えず帰りますか、と訊かれたので手代木は雪嶋の素性について初めて疑問を口にした。近付こうとしていた雪嶋は、甘い表情ではなく何か特別なことを伝えようとして緊張していたようだった。多分、この氷結状態と何か関係している。

雪嶋は一体何者なのか。

「まあ本人はああいう感じなので、俺から説明してもいいですよ」

神坂は心底面倒臭いと言いたげだったが、手代木に構っている余裕はなかった。

そして知った真実。雪嶋は人間ではなかった。

ハッキリ聴いてしまえば、なんだそんなことかと思ってしまうくらい納得のいくものだった。あの壊れた電化製品の原因も彼なのこの状態のせいだと言われるともっと納得出来る。

「俺の会社は智以外が全員人外です。怖いですか？」

そう言って笑っている神坂の紅茶色をした瞳は甘い色をしているのに恐ろしいが、雪嶋に対してはそんなことは思わなかった。

控え目にはにかんで笑う雪嶋を思い出すと、胸が甘く痛んだ。

雪嶋に会いたいと思った。会って、雪嶋の気持ちを確かめたいと思った。

神坂に雪嶋の居所を訊ねてみると、「今この世界にはいませんね。自分の国に帰ってるんでしょう。根が暗いから、引き籠ってますよ、きっと」

連れて行ってあげましょうかと訊かれたので、手代木は頷いた。迷いがない反応に、神坂はまた笑った。

「人間って頑丈な精神してますよね。俺たちより余程立派ですよ」

実に研究し甲斐があると感心しながら、神坂は手代木に寒さは平気かと訊ねた。北海道育ちの手代木はまあまあ自信があったが「あの国は人間が行ったら直ぐに凍死か」

物騒なことを言ってポケットを探った。受け取ったのは金色のブレスレットだった。そして、何処から現れたのか防寒具一式が足元に積み上がっていた。

「直ぐに身に着けてください。面白がってしまったので援助はしますが甘やかしはしません。大事な社員のテンションに関わるので覚悟していただきます。……数時間くらい歩き続けたら考えも変わるかもしれないし。死者を出したら智に怒られるので無理はしないでください」

何を言っているか解らなかったが、取り敢えず身に着けたら一瞬にして景色が変わった。白、しろ、シロ。そして遠くに微かに見えるのが白い城。

「お雪の実家はあそこです。無事にたどり着いたら会えますよ」

死神の持っているような大鎌の長い柄に腰かけている神坂は、そう言って吹雪の中に消えていった。

そうして、手代木はひたすら前に足を進めるだけの孤独な闘いに身を投じてしまった。

目的地までどのくらいあるのか解らない。そもそも幻のように見えるのだから徒歩で行ける距離ではないのではないかと。

歩き始めた当初は様々なことがグルグルと渦巻いたが、途中からひたすら雪嶋に会いたいと想いだけで足を進めていった。

かなり寒いけど、耐えられないわけではないし、冷静に己を見つめる時間にもなった。

しかし、やはり自分は雪嶋のことが好きだった。

「あら、人間がここにどんな御用かしら」

果て無く歩き続けていると、頭上で少女の声がした。幻影のように目の前に現れたのは、雪嶋と同じ雰囲気を持った、黒髪の少女で、試しに雪嶋のことを訊いてみると、彼の妹だと言った。

「お兄様、今日は御加減が優れないみたいで部屋から出てきて下さらないの。原因をご存じかしら」

それは間違いなく自分のせいだと手代木は焦った。その様子を見て、少女は「お兄様の好い方、なのかしら。……あのお兄様が、人間を……」

思案顔になり、その美しい表情に影が差した。

手代木が話しかけると、少女は彼の横を歩きながら、ぽつぽつと話し出した。雪嶋が、実は人間にいい印象を持っていないことと、その原因を。

「お兄様は殺されてもおかしくない立場の私にご自分の魔力を分けてくださった。憎んでもいいのにこんな私を愛してくださって、充分過ぎるくらいの教育を受けさせてくださり、立派な魔物に育ててくださった。お兄様には本当に感謝しているの。お兄様には幸せになっていただきたいわ。あなたが幸せにして下さるなら、私は協力を惜しまなくてよ」

手代木は何処の世界でも兄妹の絆はあるのだなと思ひ、心優しい雪嶋にまた恋をした。

彼が正体を明かすことに不安を覚え、人間である自分を受け入れるのを躊躇ったのは解る。同じ立場なら手代木もそうだ。しかし、あの時、雪嶋は最後には好きだと言おうとしていたと思う。

ならば、自分は彼の何もかもを受け入れるしかない。

城について手代木は思わず息をついた。しかし勝負はここから。

優しくて少し臆病な雪の王を手に入れるための、今までは通過儀礼に過ぎない。

呼びかける少女の声に、雪嶋の声が小さく返ってくる。それだけで胸が熱くなった。

今度胸に抱き込んだら、もう離さない。
手代木は息を飲んで扉が開くのを待った。

番外編〇二：何度目かの強盗に入られる

金融会社スチャラカばらだいの人事担当社員・雪嶋雪人（ユキシマユキト）、並びに同社債務取り立て担当社員・遠藤円（エンドウマドカ）は膠着していた。

「金出さんかいコラああッ！」

突如現れた強盗に、二人は膠着していたわけではない。

人型ではあるが原型は魔物である二人にとって、たかだか人間の強盗など恐れるものではない

。

二人が釘付けになっているのは、強盗がその凶刃を向けている人物にあった。

「金出さんとこのガキ殺すぞコラっ！」

一丁前に喚く強盗が、この会社で唯一の人間でありアルバイト社員である鷺沼智（サギヌマサトル）を盾に、金を脅し取ろうとしているのである。

「お金なんて、ありませんよ。この間決算だったんです。知らなかったんですか」

「じゃかましいんじゃ、ボケがっ！金出せつつってんだろうが！」

智はこの会社の社員が魔物であろうと動じない素晴らしい理解力と精神力の持ち主で、彼もまた命乞いどころか強盗に動じるわけもないと堂々と金がないことを説明している。

一方、社員二人は強盗の切っ先がいつ智を傷つけてしまうか心配で仕方がない。

雪嶋は洗面所からの帰り、遠藤は給湯室から出てきたところで襲来を受けていたので智とは距離があり、魔力でどうこうするには二人の力は遠距離戦には向いておらずあてにはならない。

一番有効な雪嶋の氷結能力は、強力過ぎてこの世界では制御が利かないために万が一にも智を傷つけたらそれこそ大変なことになるので使うことが出来ない。

「おい、黙ってねえで有り金全部出しやがれっ！」

「だからないって言ってるだろう」

「このクソガキが！」

説明しても通じないのかと溜息交じりの智に苛ついた強盗が、遂に彼に手をあげた。

殴られた智は後ろに仰け反ったものの、華奢な身体で意外にも持ち堪えて眼光鋭く相手を睨みつけた。

強盗、及び犯罪者に屈してはならない。

それがこの世界の鉄則で、アルバイトながらも智がそれを倣ってくれているのはいいことだと思うのだが、時と場合と己の立場を考えてほしいと二人は悲鳴をあげたくなる心境だった。

智はただの人間ではない。いや、特殊能力があるというわけではなく、ただ恐ろしく童顔なだけで普通の大学生ではあるが、彼の交友関係が問題なのだ。

智の恋人、もしくは友人の彼らがきたら大変なことになる。

以前強盗に遭った時は死者が出た。複数いた強盗犯の魂が消滅したのである。それは智の恋人の仕業だが、今回も最悪なことが起きようとしていた。

「おや、……先客かな」

その極上の美酒と同じような酔ってしまうほどの美しい声が鼓膜を打った時、冬の魔物の王で

ある雪嶋は悲鳴をあげ損ね、彼より下位の魔物である遠藤に至っては失神しそうになった。

「陛下……」

「やあ、皆の衆。お取込み中だったかな」

優雅に入ってきたのはしなやかな身体つきをした香り立つような美形の青年だった。

年齢のころは雪嶋より少し若く見え、二十歳を少し過ぎたくらい。光を吸収するくらい真黒な髪をボブのように切り揃え、同じ色をした黒い瞳は正視できないくらいときめかせるものを感じさせる。

この世の、いや全世界の魅力的なものを全て吸収して人型にしたような、その青年は着ているものこそ平素なものだが、全身から存在感を漂わせていた。

魔物二人も眩く感じているのだから、たかだか人間の強盗はその尊き御身から目を反らすことも出来ず腰を抜かしていた。

彼の登場は社員二人の想像していた最悪パターンの一つだった。

青年は天界と対をなす世界の王者、魔王陛下なのだ。

静かになってしまった室内を見回した陛下はふと、智に視線を合わせると綺麗な弧を描いた優しい眉を寄せた。

「智、その顔の傷はどうした？ 築に殴られたのか？ 最近はそういうプレイが流行なのか？」

「いえ。お気づきではないかと思いますが、今は修羅場なのです」

「修羅場とは」

「今、陛下の左斜めにいる人間は強盗という、犯罪者です。その犯罪者に僕は先ほど金を出せと言われ、断ったので殴られました」

社員二人は心の中で絶叫した。雪嶋よりも気が弱い近江近衛（オウミコノエ）だったら自殺していたかも知れない。

女王陛下とも親交があり、魔力について加護を受けている智は何も感じていないが、何の加護もない魔物二人は魔王陛下から漂う高貴な魔力が一瞬、不機嫌そうに波打ったのを感じたからだ。

絶対支配者である陛下の不況を買った魔物の行きつく先には消滅よりも絶望よりも恐ろしいものがある。

現行陛下は怒ることはないので忘れられがちな言い伝えにもなっていることなのだが、二人はそれを肌で思い出していた。

「人間の傷と言うのはそんなに簡単に治るものではないのだろう。……可哀想に。痛いのではないか」

「まあ、寝て起きて治るものではないです。少し痛みますし、今夜は腫れるかもしれません」

「なんと」

陛下の瞳が少し見開かれた。それだけで周囲の温度が下がる。気圧が呼応して低くもなった。

「友人が暴漢に遭うとは、初めてのケースだ。なんとということだ。人間も物騒なのだ。嘆かわしい」

およそ人を殴ったこともないような白く細い指で智の傷に触れた陛下は、自分の足元に何か

縋り付いてくるのを感じていた。

「うう、美しい……っ」

あろうことか強盗が陛下の眩さに目が眩んで欲情してしまい、彼にその欲求をぶつけようとしていたのだ。

「……私が欲しいか。人間の分際でこの私を組み伏せたいとでも思っているのか」

「ああ、突っ込みたい。欲しい、欲しい……」

譫言のように卑猥な言葉を陛下にぶつける強盗は、もはや人としての理性はなく、ただの盛りのついた獣と同じだった。

陛下は血のように赤いルージュのついた唇をにっと吊り上げる。

「犯罪者よ。友人を傷つけたことは万死に値するが私は無闇に殺生はしない。機会をやろう」

陛下は、自分の肌に触れてみろと言う。

智を始め、三人はそれがどういうことか解らなかった。

強盗は生唾を何回も飲み込んで、陛下の服の裾をめくろうとした。

彼の白い肌が見えるか見えないかのところで、突如「汚い手で俺の旦那に触るんじゃねえ」

声が降ってきて陛下に跪いていた強盗の頭に見事な踵落としが落ちた。獣となっても所詮は人間なので強盗は失神する。

「来たか」

「なにを暢気に言ってるの、旦那さん。服で隠れてるところは俺にしか触らせないでって言うるじゃん。触れさせるとか有り得ないから」

独占欲丸出しの男は現行女王陛下、男ではあるが魔王陛下の妻である。

魔物二人の予想できる最悪パターンの二つ目、しかも最初より危険性がある。最低だと二人は心で呟いた。

「アイデア。智の可愛い顔に傷がついた。私がもう少し早く来ていればよかったのだ」

悲しげに目を伏せる陛下に、女王は自分こそが悲しいと彼の細い腰を引き寄せた。

「俺たちの友人がこんな目に遭うとは。でも智には悪いがあんたが殴られなくてよかったと俺は思う。もしあんたの美しい顔に血の花が咲いたと思ったら、俺はこの世界を破壊してしまうだろう」

綺麗な言葉に物騒さをこめた女王は、ついでに自分が失神させた理性のない人間だった物体に目を向けた。

「なあ、こいつ貰っていいかな」

智たちは目を見合わせる。

女王は悠然と「俺の旦那さんに欲情したメカニズムを知りたい。人間の快楽は何処からくるのかって、興味があるんだ」

そう言うので誰も逆らえなかった。

もともと、女王は自分の旦那が邪な目で見られることすら嫌悪しており、連れ帰ったものについては勿論生きては帰さない。そして、その最期はめくるめく快楽による苦痛と言うもともと残忍でもっとも恐ろしい体験で締めくくられるのだろう。

智はそこまで察せなかったが、魔物二人は薄々察していた。

「あの人間、きっと直ぐには楽になれませんね」

「うちに強盗に入ったのが間違いだったな。いや、智くんがいる間に来たのが間違いだった」

「あ、陛下がくれた軟膏凄いよく効きますよ。もう痛くない」

雪嶋、遠藤、智はコメントを漏らし、ふと時計を見上げた。

「就業時間ですね。僕、戸締りしてきます」

「あ～、なんだか長かったな。なあ、みんなで後でバーに行かないか。智くんは俺たちで奢るといことで」

「いいですね。おうめさんと手代木さんも誘いましょう」

酒でも飲まないと言われてられない。三人は思っていた。

番外編〇三：「魔王陛下と女王陛下」前篇

ここは魔物の世界、略して魔界。

しかし、大昔の人間の世界とほぼ変わらず、王都は日々貴族たちが栄華を誇り夜会やパーティーを繰り広げている。ただし、人間とは違うのは貧富の差がないことと、争いが起きないこと。

何故ならば魔界広し、王は幾人もいれど、その上に立つ、絶対的で普遍的な支配者によってその均衡を保たれているから。

その、何人たりとも侵すことが出来ないのが魔人と呼ばれるこの世界でただ一人の人物。彼は、魔王陛下と呼ばれている。

その日の魔界はいい天気だった。

「アルバート、うちの旦那さんは何処だ」

「女王陛下。僭越ながら旦那さん、ではなく陛下と、せめて旦那様とお呼びください」

何万回か解らない注意にも、女王陛下アイデアは気に留めることはない。

「魔王陛下でしたら先ほどまでエイスース侯爵夫人とお茶をなさってありました」

「あ～、あいつまだ狙ってるの？いい加減にしるよな、クソ婆」

「女王陛下、お言葉が過ぎます」

「アルバートもああいうのは通すなって言ってるだろ？マジでまた首刎ねるぞ」

魔王陛下は千年も前にアイデアと婚姻を結んでいる。しかし未だに彼にお近づきになりたい魔物は多く、貴族は特に厄介だった。

侯爵夫人だけではなく、その夫である侯爵本人も陛下に気があり、先のパーティーでは彼の髪を一筋貰い受けるという至上の喜びを賜ったばかりだった。

勿論、嫉妬深いアイデアは面白くはない。

「エイスース侯爵夫人は五十年も前からアポイントメントを取っておいでです。無下には出来ませんでした。お許してください」

有能な執事はそれだけ言うと、頭を垂れて下がっていった。彼も、陛下の本当の居場所は知らないというわけだ。

「あいつが知らねえってことは、あそこだな」

長い金髪をガシガシ梳いて、アイデアは陛下お気に入りの花園に足を踏み込んだ。

永遠花という、魔王陛下の魔力だけでしか生きられない儂くも美しい花が咲き乱れた花園は永遠に花が見頃だった。

「お、いたいた」

宝石で作られた長椅子に、陛下を見つけたアイデアはきつい目元を和らげた。

「あの時と一緒にだな……」

咲き誇る花の中、たった一人で目を閉じて眠っている、美しい魔王陛下。

彼に初めて出会った時、自分はまだ子供だった。

その時から、彼一筋に生きてきた。きっと、この身が減びる時まで彼のことを想い続けて生きていくのだろう。

「恋が、したいのだ」

幼い自分を見詰め、美しい瞳を細めて語った彼は、ちゃんと自分に恋をしてくれているのだろうか。

婚姻を結んで気の遠くなる月日が経っているが、未だに自信がない。

アイデアは彼を愛しているし、態度でも言葉での遺憾なく現わすのだが、彼は生まれながらの王者である気品がそれを許さないのかあまりアイデアに愛を囁きかけることはない。

そっと近付き、跪く。長椅子に身体を預けて眠っている陛下の指に、自分のものを絡めた。

「ずっと愛してるよ、イリス……」

愛の言葉と自分だけに呼ぶことを許された陛下の名前を呟くと、彼はふっと目を開けた。どんな宝石も見劣りしてしまう美しい真黒な瞳にアイデアが映る。

「我が妻よ。お前が幼いころの夢を見ていた」

「奇遇だな。俺もあんたに初めて会った時のことを思い出していたところだ」

啄むようなキスをする、陛下は小さくアイデアを呼んで腕を伸ばした。頭を抱き込むように引き寄せられ、キスが深くなる。

「……っん」

「あんたはずるい。幾万を虜にした挙句、蜜を与えるのは俺だけときてる。おかげで俺は命が幾つあっても足りない」

「婚姻を結ぶ時、言ったではないか。私の妻は、なかなか遣り甲斐があると」

陛下は何を今更と蕩かすように笑った。その笑みで、今朝貴族に買収された給仕に毒を盛られたことなど水に流せる。

「まあ、あんたの妻は遣り甲斐があることは確かだ。訓練所で学んだ技能や培った耐性は大変役立っている。それに、あんたを堂々と愛せるという最大の御褒美ももらえる」

陛下を愛しているのはこの世界の住人の共通項だろう。しかし、不遜すぎて誰も口には出さない。

その強烈過ぎる魔力に下級のものは身が千切れんばかりの畏怖を覚え、中級のものは心で敬愛を思うことすら憚られ、上級のものもやっと尊顔を見て失神するのを堪えるくらいだ。

一部、陛下に不埒なものを駆り立てられている気狂いたちは彼とは似ても似つかない低級魔を夜な夜な慰み者にしているという、実しやかな噂が流れてはいるが。

表立って愛を公言出来るのはアイデアにしかない特権だった。

「しかし、お前がああの時の条件を果たして再び来るとは、……実はあまり期待はしていなかった」

「えっ？」

長椅子に座りなおした陛下はぽつんと洩らし、彼に娶られるために五百年以上努力していたアイデアを驚愕させた。

「もしかして、会う子供全員に同じこと言ってたのかっ？」

「そういうわけではない。私を尻軽のように言うな、失礼な。注文を付けたのはお前だけだ。...
...お前は、なにか言っておかないと忘れそうだったからな」

「あ〜、まあ、あの時は早く帰ってえってずっと思ってたからな。大体、魔王陛下の嫁候補って言うのもぴんと来なかったし、俺男だし、って思ってたから。姉さんたちがいたから周りから期待もされてなかったし、お菓子が美味しいだけって言うか.....」

散々なことしか思い浮かばず頭を掻くアイデアだったが「そういうお前だから、私の元に来れたのかもしれないな」

陛下は小さく笑って指で花を弄っている。

「でもさ、こうしてあんたが出した条件もクリアして婚姻結べたんだから、俺って凄いよな」

魔王陛下に見初められるために、何万もの子供が集められた、あの部屋の中で、独り抜け出して庭を探検していた自分が、彼の隣にいるということは奇跡に近いのだろう。

「俺さ、あの時に思ったんだよね」

一目見た、魔王陛下。

人伝に聞いていた、その美しさと恐ろしさ。

目の前の青年がそうだという確信はなかったが、アイデアは「絶対にこの人の妻になりたいって、思ったんだ.....」

後頭部に組んだ手を添えてダラダラと告白すると、陛下は小さく「そうか」

と、ただそれだけ言った。

陛下は無口ではないが、あまり口数が多い方でもない。それは彼の声が魔物ですら魅了してしまう美声であるせいで、注意して話さないと聴くものの理性を狂わしてしまうからだ。

きつとここ五百年くらい頻繁にアポを取って陛下に拝謁しているエイスース伯爵夫人は、理性を狂わしてしまったのだろう。理性の塊と呼ばれていた彼女の発狂を、陛下は楽しんでいるに違いなかった。

「旦那さん、今日も夜会に出るのか？」

ならばそろそろ自分はドレスを選定しなければいけないと立ち上がったアイデアに、陛下は首を振った。

「今日は久し振りにお前の幼いころのことを思い出したので、お前と二人きりで過ごしたい」

「.....。もう、可愛すぎでしょ、あんたは.....」

アイデアが顔を赤くすると、「お前はいつまでも初心だな」

立ち上がった陛下は表情を和らげて腕を軽く出した。それに、自分の手を預けたアイデアは抱き付くように連れ添う。

身長も体躯も自分の方がいいが、陛下はぐらつくことなくエスコートしてくれる。誰が教えたわけではないのに、陛下は紳士だ。

「なあ、今晚は一緒に眠ってもいいかな」

「そうだな」

「時の部屋でもいい？あんたの身体を隅々まで味わいたい」

こちらの時間で十分が、時の部屋だと一か月になる。

「私は明日も公務だ。身体にダメージが残ることは避けたい」

「なんだよ、俺より絶倫の癖に」

ブーブー文句を言うアイデアの頬に、陛下はキスをした。

「……………」

「数百年分、一度にお前に愛されるのもいいが、私はお楽しみは少しずつ消化したいちなんだ……」

時の部屋には行かないが可愛がってくれて構わないぞと、吐息のように甘く言われて、アイデアは眩暈がしそうになった。

「それ、反則……」

全くもって陛下には敵わない。流石は魔界最強というべきか。

夜、魔王陛下の嬌声が二人だけの部屋に響く。

甘美な声に、アイデアは腰が砕けそうになるくらい酔わされた。

番外編〇四：「魔王陛下と女王陛下」後篇

前王が崩御して、魔王は空席となった。しかしそれで争いが起こるほど、魔物たちは低能ではない。前王の威光は次代の王が産まれるまで続く。

そして、魔人が産まれた。

魔物と違い、魔人は生まれながらにして成体をとっている。しかし、その時産まれた魔人は歴代のそれとは少し違った。

魔力が、桁違いに強すぎた。

推定ではあるが、現行魔王陛下は天界の王よりも純粋な力比べでは勝るくらいの力を持っていた。平和主義の陛下は天界に踏み込むなどはしなかったが。

その陛下は、産まれて千年目で伴侶を娶ることが決まりになっている。彼は男なので人間の感覚からすると伴侶は女性になるのだが、無から生まれ無に還る魔人は生産性を期待されていないので伴侶の性別はどちらでもよかった。名義が女王、というだけで。

陛下の伴侶候補は、魔物の中でも当然のこのように貴族が真っ先に名乗りを上げた。

貴族と言っても名が古いかどうかなのだが、古さはより魔界に貢献しているという名誉があるので貴族たちは矜持を持っている。皆が皆、麗しい魔王陛下に子供を嫁がせたいと思っていた。

「なあなあ、姉さん」

「どうしたの、アイデア」

「おれ、帰りたくなってきた」

百歳違いの姉のドレスを掴んで駄々をこねると、「折角ここまできて、それはないわ？お菓子なら幾らでも食べてきていいから」

彼女は溜息をついて掴まれたしわを丁寧に伸ばした。

「もうかったるいよ。しかも魔王陛下いないらしいじゃん。おれたち来ても意味ないんじゃない？」

「馬鹿ねえ、陛下は何処かでこの様子を見ていらっしゃるわ。執事様が先ほど、数人を退出させたのを見ていなかったの？あの子たちは陛下の気に障って家に帰されたのよ」

「ふうん」

生まれて三百年しか経っていないアイデアは未だ人間で言う中学生くらいの姿かたちをしているが、思考は未だお子様だった。

正直、自分が結婚するとか考えていないし、顔も見えない相手となんてそれこそ考えられない。

詰まらなすぎると、アイデアはその場を抜け出した。

放っておいても姉たちの誰かが選ばれるに決まっていると、シスコン気味に考えていた。

しかしこれはあながち外れではない。アイデアの家は神々に嫌われて魔物に堕ちた死神の一族で、魔界が始まった当初から存在する名家中の名家。貴族の中でも特別視されている家だったからだ。正直、アイデアの両親は彼には陛下の伴侶としては期待していない。アイデアは娘ばかりだった名家の嫡子で、家を継ぐことを期待されていた。

「うわ、すげえ綺麗な花ばかり」

闇雲に城の中を歩き回って外に出て、使用人に見つからないようにまた歩き回っていたアイデアは結界に気付かず花園に足を踏み入れた。

色彩が目まぐるしく散っている花園はこの世の楽園と言っていいくらいで、アイデアは堅苦しく思っていたことをすっかり忘れて見て回った。

長いこと歩いて、すり鉢状になっていることに気付く。中心はどうなっているのかと歩を進めると、何かの気配がした。

「・・・・・・・・」

子供ながらに、怖いと思った。

アイデアは恵まれた出自だけでなく、基礎的な魔力も高い。物怖じしない彼だったが、中心に近付くにつれ感じる魔力は足が躊躇うくらいの禍々しいものだった。

それでも勇気を振り絞って近付くと、そこにあったのは長椅子と、それに身を任せている青年だった。

青年は、それまでアイデアの心をとらえていた花々たちをも一瞬で色褪せさせるくらい美しかった。

真黒な髪は滑らかそうな白い頬に流れ、息づく唇はちょうどいい厚さで紅が引いてある。まつ毛はけぶるように長い。飾りっ気はないが仕立てのいい服に身を包み、胸のあたりが呼吸によって微かに動いている。

アイデアは近付きたいという欲求を抑えられなかった。恐ろしさに震えそうになる足を叱咤して一歩ずつ近付いて、触れられる距離まで来た。そっと、手を伸ばすと「まよいごか」

全身が痺れるくらいの美声が鼓膜を打ち、次に真黒な瞳がアイデアを射抜いた。

息を飲む。自分を見詰める彼は、誰をも跪かせるものを持っていた。

悲鳴を上げかけたアイデアが口を押えていると、彼は少し表情を動かした。柔らかく、安心させるように。

「その年からすると伴侶候補か。全く、アルバートも困ったものだ。その気はないというのに……」

少し嫌そうに、彼は息をついた。

「魔王陛下は、伴侶を求めていらっしゃらないのですか？」

決まり事なのにと思わず口を挟むと、彼は少し困ったような顔をした。

「魔王に子供は出来ない。ならば伴侶はいらないだろう」

「ですが、支えてもらいたいものなのでは？」

「だから伴侶が必要だということではあるが、……このようなことをお前に言って解るかとも思うのだが」

思案顔をした彼は、少し頬を染めた。

「恋が、したいのだ」

「……こい……？」

恋愛については知っている。しかし、魔王陛下のような尊き御身は恋愛について興味はない

と思っていた。

魔王陛下はこの世界の柱で、住人の誉。

一人に心を傾けるような色恋と言うのが結びつかない。

「おかしいか……」

気まずそうに言われて、アイデアは直ぐに首を振った。

「おれはいいと思います。魔王陛下だって恋したいですよ。碌に知らない人を伴侶になんかしても支えられるか心配ですし」

「……お前は小さいのによく解っているな」

「小さくなんかありません。おれ、女王陛下になりたいです」

彼はアイデアの不遜な発言に目を細めた。

「ならば、条件を出そう」

嗤うでもなく、嘲るでもなく、彼は真面目にアイデアを見詰めた。

「私を癒す傘になれるよう、身長を伸ばせ。私を支えても崩れぬよう、身体つきを逞しくしろ。私が愛せるよう、容姿を美しく保て。私の心を繋ぎとめるよう、教養を身につけろ」

出来るかと、美しい声が訊ねる。

アイデアは頭より先に心が反応して、はいと応えた。

「正式に伴侶の選考が始まるのはこれより五百年が経った時だ。お前も立派な青年になっていることだろう」

彼はアイデアの手の甲を撫でた。

「お前が努力している間、私も私の出来る限りをしよう。お前がした努力に見合うような王であり続けよう」

力強くそう言って微笑んだ彼に、アイデアは恋をした。

それから、アイデアはあらゆることに努力を重ねた。持ち前が俺様で不真面目に見られがちだったが、彼は周りのどれよりも優秀だった。

「お前さー、めちゃくちゃ凄い家の嫡子なのに、なんで更に努力してるの？ダラダラしてりゃあいいじゃん」

学友にそう言われたことがある。

アイデアは決まって「俺はね、世界一の花婿から期待されてるの。だから世界一の花嫁になるの。そのためにはちゃんと花嫁修業しないと駄目でしょ」

そう、軽口をたたく。

「お前ほどの男にそう言わせるやつってどんだけだよ。婚約者か何か？」

「婚約者だったらこんな努力しねえ。確証がねえんだ。あの人の隣に立つ条件を揃えるまでは油断できない。なんたって全ての魔物があの人を狙ってるんだからな」

「なんだそれ。まるで魔王陛下の伴侶にでもなる勢いだな」

お前だったら有り得るかもと、友人は冗談交じりに言う。

アイデアは不敵な笑みを返すだけだった。

更に自分磨きをつづけたアイデアは、見事に何万ものライバルを押し退けて魔王陛下の伴侶に

なる。

周りの反応がさまざまで面白かった。

「やっと、あんたの隣に立てたな」

腰回りがきついドレス、履き慣れない靴。死ぬまで窮屈な暮らしが待っているというのに、イデアは幸せを噛み締めていた。

「よくここまで来た」

「言ったでしょ、女王になるって」

今はもう見下ろすことになっている彼に、飛び切りの笑顔を向ける。

彼、魔王陛下イリスは少し驚いたように目を軽く見開き、それから誰をも魅了するように少しだけ表情を崩した。

「私に恋をさせてくれるのだな」

「勿論です、旦那さん」

向き合って初めてキスをした。

魔界に歓喜の歌が響く。

それから、魔王陛下と女王陛下は恋を始めた。

後書き：牡丹えび

初めましての方もそうでないかたも。牡丹えびです

パブー様にて掲載の第二作目はファンタジーチックなものになりました

雪の化身とタフな修理屋の話です

今回舞台となっている「金融会社スチャラカぱらだいす」が出てくる「黒い名刺に気を付けてろ！」というのはシリーズものになっています

実は雪人と手代木は脇役で、本当の主人公は別にいます

社長×バイトです

このシリーズの次回は真打登場になると思いますし、何故このシリーズが「黒い名刺に気を付けてろ！」なのかも解ると思います

このシリーズは基本的に全年齢対応です。そして無料です

ただ、女王陛下×魔王陛下の話は本格的に書いたら年齢制限くらいは付きそうです

今回の話はソフトなものですが、番外編の陛下たちのものはやや濃いめで倒錯チックですの
でたっぷりと書きたいと思っています。書ける機会があれば

えびの作品はページ数にして13頁を目指して書かれていて、今回も本編のほかに番外編がありました

手代木サイドからも番外編にしてあります

陛下たちの話も番外編で、ほんのおまけ程度に書いたのですが読み方によってはちょっと濃いかも
かもしれません（たびたび書いて申し訳ないですが陛下たちはアダルトを目指している
ので濃い感じ）

無料版なので内容は読んでいただければ解るので近況を少し

えびは関東に住んでいるのですが、ここ最近は暑くてまさにゆでえびや乾燥エビになる状態が
続いています

外に出ればじりじり、中でむしむし

冷房は入れていても何となく暑い。早く冬が来ないかなと思っているのですが、冬が来たら来
たで寒いものなので困る。かと言って好きな季節はない

もう何も感じなくなりたいです

そんなえびはアプリゲームにはまっていて毎日やり込んでいます。飽きやすいのでやり込んで
は違うものに行くという下種なやり方をしているのですが

チャット機能のあるゲームを最近やったのですが、年齢の差からか、会話についていけないの
でゲーム以前にチャット機能があると避けてしまう日々です

ゲームのキャラは年を取っていないからみんな解らないだろうけど、会話ではボロが出てしま
うのです

若くなりたい

では、次回は来月の有料版でお目にかかれればと思います

牡丹えびでした。二〇一五年〇八月某日